

授業科目名	現代芸術論 1 Contemporary Art Theory 1	担当教員名	専攻長：長沢桂一、瀬沼健太郎、 阪口正太郎、小杉栄次郎、皆川嘉博 学務委員長：鈴木 司
時間割	月曜日 2、3 時限	オフィスアワー	各教員による
授業科目区分	専門科目－専門共通科目－総合科目		
履修区分	必修科目	授業形態	講義
配当年次・学期	1 年次前期	単位数	4 単位
前提とする授業科目、密接に関係する授業科目 「現代芸術演習」と内容が関連している。			
授業に関連するキーワード 「現代美術」「ものづくり」「プロダクトデザイン」「情報」「建築」「景観」「歴史」「文化」			
授業の到達目標及びテーマ 秋田公立美術大学の 5 つの専攻のそれぞれのコンセプトや特色を総合的に知ることによって本学が目指す新しい表現の形を論理的に学ぶ。 美術・デザイン・工芸・景観など多様な表現の基礎的な知識を得ることで、今後自分自身が表現を行う上での土台となる考え方を身につける。			
授業の概要 5 つの専攻に所属する教員がオムニバスで授業を行う。各専攻の基本的なコンセプトや特色を学んでいくが、それだけではなく専攻同士で重なる考え方や専攻を超えた考え方も同時に学んでいく。 シラバスに掲載されている教員だけではなく学内外でそれぞれの分野で活躍する方にも授業を行ってもらい、さらに広い知識の習得を目指す。			
授業計画	オムニバス		
第 1 回～6 回	ビジュアルアーツ専攻（島屋 純晴、長沢 桂一、阿部 由布子、大谷 有花、高嶺 格、萩原 建一） 「現代における表現の社会的意味と価値について」		
第 7 回～12 回	ものづくりデザイン専攻（小牟例 尊人、安藤 康裕、今中 隆介、山路 康文、山岡 惇、安藤 郁子、熊谷 晃、瀬沼 健太郎、森 香織） 「工芸素材やプロダクトデザインなど各領域の特色の紹介と、ものづくりに向き合う姿勢・視点について」		
第 13 回～18 回	コミュニケーションデザイン専攻（妻 鎮夷、水田 圭、阪口 正太郎、飯倉 宏治、官能 右泰、坂本 憲信、孔 鎮烈、他） 「メディアの進化によるコミュニケーションデザインの変化について」		
第 19 回～24 回	景観デザイン専攻（小杉 栄次郎、菅原 香織、石山 友美、他） 「地域文化に裏打ちされたランドスケープについて」		
第 25 回～30 回	アーツ&ルーツ専攻（皆川嘉博、村山 修二郎、藤 浩志、石倉 敏明、服部 浩之、他） 「歴史や文化（ルーツ）をベースにした芸術表現（アーツ）について」		
授業時間外の学習内容等 この授業のためにノートを準備し、配布された資料や映像をもとに授業を振り返り、理解を深める。各専攻から出されるレポート制作のために、調査・考察を行いまとめておく。			
評価方法 各専攻から出された課題レポート 100%			
履修上の注意 秋田公立美術大学で学んでいく上での土台となる授業です。1 年次に単位を修得するよう努力すること。			
テキスト 必要に応じて配布する。			
参考書・参考資料 参考になる作品集・論文集・映像等を随時しょうかいしていく。			

授業科目名	現代芸術論 2 Contemporary Art Theory 2	担当教員名	専攻長：長沢桂一、瀬沼健太郎、 阪口正太郎、小杉栄次郎、皆川嘉博 学務委員長：鈴木 司
時間割	月曜日 2、3 時限	オフィスアワー	各教員による
授業科目区分	専門科目－専門共通科目－総合科目		
履修区分	必修科目	授業形態	講義
配当年次・学期	1 年次後期	単位数	4 単位
前提とする授業科目、密接に関係する授業科目 「現代芸術演習」と内容が関連している。			
授業に関連するキーワード 「現代美術」「ものづくり」「プロダクトデザイン」「情報」「建築」「景観」「歴史」「文化」			
授業の到達目標及びテーマ 秋田公立美術大学の 5 つの専攻のそれぞれのコンセプトや特色を総合的に知ることによって本学が目指す新しい表現の形を論理的に学ぶ。 美術・デザイン・工芸・景観など多様な表現の基礎的な知識を得ることで、今後自分自身が表現を行う上での土台となる考え方を身につける。			
授業の概要 5 つの専攻に所属する教員がオムニバスで授業を行う。「現代芸術論 1」で学んだ知識や経験を下地としてそれぞれの分野についてさらに深く学ぶと同時に、既存のジャンルを超えた新しい表現について考察できるようになるために、基礎的な課題などを伴いながら学んでいく。 シラバスに掲載されている教員だけではなく学内外でそれぞれの分野で活躍する方にも授業を行ってもらい、さらに広い知識の習得を目指す。			
授業計画 オムニバス 第 1 回～6 回 ビジュアルアーツ専攻（小田 英之、岩井 成昭） 「現代における表現の社会的意味と価値について」 第 7 回～12 回 ものづくりデザイン専攻（小牟例 尊人、安藤 康裕、今中 隆介、山路 康文、山岡 惇、 安藤 郁子、熊谷 晃、瀬沼 健太郎、森 香織） 「使用感の充足を生み出すデザインを、生活のシーンを想定し考察する」 第 13 回～18 回 コミュニケーションデザイン専攻（裊 鎮爽、水田 圭、阪口 正太郎、飯倉 宏治、官能 右泰、坂本 憲信、孔 鎮烈、他） 「メディアの進化によるコミュニケーションデザインの変化について」 第 19 回～24 回 景観デザイン専攻（小杉 栄次郎、菅原 香織、石山 友美、他） 「地域文化に裏打ちされたランドスケープについて」 第 25 回～30 回 アーツ&ルーツ専攻（皆川嘉博、村山 修二郎、藤 浩志、石倉 敏明、服部 浩之、他） 「歴史や文化（ルーツ）をベースにしたフィールドワーク・リサーチについて」			
授業時間外の学習内容等 この授業のためにノートを準備し、配布された資料や映像をもとに授業を振り返り、理解を深める。各専攻から出されるレポート制作のために、調査・考察を行いまとめておく。			
評価方法 各専攻から出された課題レポート 100%			
履修上の注意 秋田公立美術大学で学んでいく上での土台となる授業です。1 年次に単位を修得するよう努力すること。			
テキスト 必要に応じて配布する。			

授業科目名	現代芸術演習 (アーツ&ルーツ) Contemporary Art Seminar (Arts & Roots)	担当教員名	皆川嘉博、村山修二郎、藤浩志、 石倉敏明、服部浩之
時間割	金曜日 2、3 時限	オフィスアワー	各教員による
授業科目区分	専門科目—専門共通科目—総合科目		
履修区分	選択必修科目	授業形態	演習 (オムニバス)
配当年次・学期	2 年次前期	単位数	2 単位
前提とする授業科目、密接に関係する授業科目 「現代芸術論」の履修を前提とする。			
授業に関連するキーワード ルーツ、フィールドワーク、グループワーク			
授業の到達目標及びテーマ 本授業では数名のグループによるリサーチを実施し、それを元に各個人が主題の設定からフィールドノートの作成までの過程を体験する。フィールドワークや文献調査に基づく考察を深めることで、自らの適正を探索する授業である。フィールドワークで触れたもの・発見したものについてプレゼンテーションまで行うことを目標とする。			
授業の概要 この授業が始まるまでに自分が興味関心のある研究テーマを設定し、研究計画を立てる。 この授業でのリサーチを実践するために、以下の3点に重点をおき、評価する。 ①フィールドワーク：人や場所と直接対話することでリサーチを深める。 ②文献調査：資料や文献など調査・収集し、新たな発見や裏付けをとる。 ③インタビュー：対話を通して調査に関わる様々なものに触れる。 以上のようなリサーチを実践し、調査地域で聞き書きの内容や風景、状況などを書き留め記録していくノート、「フィールドノート」を作成し、提出する。 最終日にリサーチの成果をまとめた内容をプレゼンテーションする。			
授業計画 第1～2回 ガイダンス／研究計画の発表／グループ分け 第3～4回 フィールドワーク ステップ1 (導入) 第5～6回 中間発表 第7～8回 フィールドワーク ステップ2 (実践) 第9～10回 フィールドワーク ステップ2 (実践) 第11～12回 フィールドワーク ステップ2 (実践) 第13～14回 フィールドワーク&プレゼンテーション準備 第15回 フィールドワークを基にしたプレゼンテーション (フィールドノートの提出) *フィールドワーク時には交通費等の諸費用がかかる場合があります。 *作品制作には材料費が必要です。 *フィールドワークの過程で適宜、プレゼンテーションや講評を行います。			
授業時間外の学習内容等 授業時間外を利用して、積極的にフィールドワークに取り組み、リサーチすることにより授業内容を深める。			
評価方法 講評ならびにフィールドノートの提出、授業への取り組みにより総合的に採点する。			
履修上の注意 各学生の資質や目標に応じて、授業計画を柔軟に運用することがあります。			
テキスト 特になし。			
参考書・参考資料等			

授業科目名	現代芸術演習（景観デザイン） Contemporary Art Seminar (Landscape Design)	担当教員名	小杉 栄次郎、菅原 香織、 石山 友美、井上 宗則、 岸 健 太
時間割	金曜日 2、3 時限	オフィスアワー	各教員による
授業科目区分	専門科目—専門共通科目—総合科目		
履修区分	選択必修科目	授業形態	演習
配当年次・学期	2 年次前期	単位数	2 単位
前提とする授業科目、密接に関係する授業科目 「現代芸術論」の履修を前提とする			
授業に関連するキーワード フィールドワーク、グループワーク景観、空間、デザイン			
授業の到達目標及びテーマ 景観デザイン専攻では、私たちが生きる社会の可能性と課題がその土地の歴史や自然環境とともに様々な次元で交差する現場を「景観（ランドスケープ）」として定義し多様な表現領域の制作活動に取り組みますが、その基礎演習として、空間デザインの計画と実際の空間づくりを行います。グループワークを通じて協働者とのディスカッションにより個人のアイデアが拡張され計画がブラッシュアップしていくプロセスを経験した上で、一つのプロジェクトを実社会の中で実現することを目標とします。			
授業の概要 授業前半では与えられた課題について、数班によるグループワークでフィールドワークから、空間・場づくりの計画を構想し中間講評で提案します。後半ではそれらの提案の中から、もしくは提案を基に履修者全員のディスカッションにより一つの計画案にまとめて、履修者全員が役割分担をして計画実現に向けて作業を行います。			
授業計画 第 1－2 回 グループワークによるリサーチとフィールドワーク作業 1 第 3－4 回 グループワークごとのエスキース 1 第 5－6 回 グループワークごとのエスキース 2 第 7－8 回 中間発表・講評。その後ディスカッションによる計画の絞り込み 担当者決め 第 9－10 回 実現に向けた作業報告、教員によるエスキース 1 第 11－12 回 実現に向けた作業報告、教員によるエスキース 2 第 13－14 回 実現に向けた作業報告、教員によるエスキース 1 第 15－16 回 最終発表・講評			
授業時間外の学習内容等 授業時間では教員とのエスキース指導に多くを当てるため、授業時間外の作業が見込まれている。			
評価方法 課題の成果 60% 授業への取組 40% ※各自の役割などを記したポートフォリオにより課題の成果として評価する。			
履修上の注意 プレゼンテーションにかかる費用、現地調査の交通費は学生の負担とします。 空間づくりの材料は支給するが、その内容は課題発表に合わせて学生に通知します。 プロジェクトの進行に応じてプログラムの内容は適宜変更することがあります。			
テキスト 授業内容に関わるプリントを配布			
参考書・参考資料等 授業内で必要に応じて随時紹介する			

授業科目名	現代芸術演習 (ものづくりデザイン) Contemporary Art Seminar (Creative Manufacturing Design)	担当教員名	小牟禮 尊人、安藤 康裕、 山岡 惇、安藤 郁子、 熊谷 晃、森 香織、 瀬沼 健太郎
時間割	金曜日 4、5 時限	オフィス	各教員による
授業科目区分	専門科目—専門共通科目—総合科目		
履修区分	選択必修科目	授業形態	演習 (オムニバス)
配当年次・学期	2 年次前期	単位数	2 単位
前提とする授業科目、密接に関係する授業科目 ものづくりデザイン演習 1 素材と表現・デザイン			
授業に関連するキーワード 工芸 デザイン 素材			
授業の到達目標及びテーマ 現代生活に求められる「使用感の充足」という価値観を求めて、造形的感性を抽出するべく、様々な素材、技法を用いて実際に作品制作を行う。作品の完成が終了ではなく、制作したモノを実際に使用し、その素材感と、本来モノに携わるべき使用感覚を検討、分析し、自己のものづくりの基本として据える力を養う事を最終目標とする。学生は制作した作品が持つ、素材の選択、製作の目的、制作過程、変更点、到着点等について他者の意見に耳を傾けながら自己で評価し、次の作品へと生かす習慣付けを学ぶとともに、3 年次のコース選択への足がかりとする。			
授業の概要 受講生を 2 班 (A 班目をガラス・彫金・陶芸、B 班目を木工・染色・漆工) に分け、6 名の教員がオムニバス形式で授業展開する。作品を使用するシーンや、実際に使った時の触感、重量感、音感などの五感で感じる使用感を想定し、各自がテーブルウェアセットを制作する。講評会では 2 班のすべての作品を展示し制作の目的などを発表する。			
授業計画 A 班：ガラス・彫金・陶芸で制作 B 班：染色・木工・漆で制作 (ガラス：ガラスプレートの制作) (染色：ランチョンマットの制作) (彫金：カトラリーレストの制作) (木工：スプーンの制作) (陶芸：器の制作) (漆：沈金漆碗の制作) [1～8 週目] 第 1 回～5 回 A 班、B 班共に 1 種類目の素材で制作 第 6 回～10 回 2 種類目の素材で制作 第 11 回～15 回 3 種類目の素材で制作 [9～16 週目] 第 17 回～21 回 A 班、B 班共に 1 種類目の素材で制作 第 22 回～26 回 2 種類目の素材で制作 第 27 回～31 回 3 種類目の素材で制作 第 32 回 合同講評：前半、後半グループの合同講評			
授業時間外の学習内容等 必要に応じて時間外に制作を行うこと			
評価方法 作品 70% 授業態度等 30% 100 点満点で 60 点以上を単位認定要件とする。			
履修上の注意 汚れても良い安全な服装で受講してください。※材料費が別途必要です。※授業時間外にも授業の準備や制作が必要です。			
テキスト 必要に応じて適宜配布			
参考書・参考資料等			

授業科目名	現代芸術演習（ビジュアルアート） Contemporary Art Seminar （ Multidisciplinary Arts）	担当教員名	島屋 純晴、小田 英之、岩井 成昭、 高嶺 格、長沢 桂一、大谷 有花、 萩原 健一、阿部 由布子
時間割	金曜日 4、5 時限	オフィスワ	各教員による
授業科目区分	専門科目－専門共通科目－総合科目		
履修区分	選択必修	授業形態	演習（オムニバス）
配当年次・学期	2 年次前期	単位数	2 単位
前提とする授業科目、密接に関係する授業科目 ビジュアルアート演習 A			
授業に関連するキーワード 絵画、彫刻、映像、テキスタイル、パフォーマンス、インスタレーション、イラストレーション、メディアアート			
授業の到達目標及びテーマ 専門専攻教育の導入として、美術における多様な領域（絵画、彫刻、映像、テキスタイル、パフォーマンス、インスタレーション、イラストレーション、メディアアート領域等）の制作を軸に、それらが持つ考え方や手法を様々な角度から捉え直すことで、既存の枠を超えた美術の可能性を探索その手掛かりを得ることを目的とする。			
授業の概要 一つのテーマに沿って様々な分野・領域をそれらが持つ独自性、意味性、関連性を考えながら横断的に課題に取り組む。テーマに添って思考を深め、それぞれの領域やメディアが持つ特性を理解し、表現の多様性を学びながら、専攻での複合的な作品制作の素地を固めるための授業である。そのためビジュアルアート専攻 8 名の指導教員がオムニバス形式をとり絵画、彫刻、映像、テキスタイル、パフォーマンス、インスタレーション、イラストレーション、メディアアート領域等それぞれの専門性に沿ったレクチャー・課題を通して指導する。			
授業計画 第 1 ガイダンス・課題テーマ分析・考察。（小田） 第 2～ 3 回 立体／抽象彫刻の制作法の基礎を指導する。また作品と空間の関係性に関わる問題ととしてフォルムと空間の必然的關係について学ぶ。（島屋） 第 4～ 5 回 現代絵画の多義性、意味性を具現化するためのコンセプト立案と表現方法（形象、画面構成、モチーフ）の関係性について学ぶ。（大谷） 第 6～ 7 回 テキスタイルによる作品制作をととして、多様な表現の可能性と作品制作の基礎を学ぶ。（長沢） 第 8～ 9 回 ニューメディアを用いた課題制作を通じて、既存の美術の枠を超えたメディア表現の可能性について学ぶ。（阿部） 第 10～ 11 回 異なる素材やメディアが共存する意味と効果を体験しながら、インスタレーションの基礎を学ぶ。さらに、インスタレーション表現における空間と時間、そして社会との関りを解説する。（岩井） 第 12～ 13 回 映像メディアの特性に注目し、レクチャーと課題制作を通じ映像メディアの可能性を学ぶ。（萩原） 第 14～ 15 回 表現としてのパフォーマンスが社会の中でどう機能するか、課題を通じて実践的に学習する。（高嶺） 第 16 回 テーマ・課題のまとめ。（小田）			
授業時間外の学習内容等 授業時間外に制作の準備および制作をおこなうこと。			
評価方法：制作姿勢（30%）、表現力・思考力・独創性（70%）で評価。 100点満点で60点以上を単位認定要件とする。			
履修上の注意：状況に応じて授業の構成・順番を変更することがある。			
テキスト：必要に応じて指示する			
参考書・参考資料等：適宜配布、指示する。			

授業科目名	現代芸術演習(コミュニケーションデザイン) Contemporary Art Seminar (Communication Design)	担当教員名	官能 右泰、阪口 正太郎、坂本 憲信、孔 鎮烈、裴 鎮奭、水田 圭
時間割	金曜日 4、5 時限	オフィスアワー	各教員による
授業科目区分	専門科目－専門共通科目－総合科目		
履修区分	選択必修科目	授業形態	演習 (オムニバス)
配当年次・学期	2 年次前期	単位数	2 単位
前提とする授業科目、密接に関係する授業科目 現代芸術論 (コミュニケーションデザイン)			
授業に関連するキーワード 統合コミュニケーションデザイン、ロゴタイプ、広告、写真、紙媒体、編集、ウェブ、IT、ゲーム、イラストレーション、論理思考、パッケージデザイン、ブランディングデザイン、映像			
授業の到達目標及びテーマ コミュニケーションデザインの専門分野の学習に入る前に、デザイン制作に向かう態度、思考法、演習を通して理解、確認する。誰のため、何のため、どのようにしたら目的が達成されるのか、デザインの向かうべき方向と自身がとるべき態度について考えるのが授業の最初の目標である。また、各専門分野の具体的な内容を理解する演習を体験し、「感じること」「考えること」「発見すること」「伝えること」のそれぞれの関連と重要性を理解する。			
授業の概要 コミュニケーションデザインとは、社会に対して、どのようなメッセージを送り、そこにどのようなコミュニケーションを生み出すのかということである。本演習は、ビジュアル表現をベースに、あらゆるメディア表現に必要なコミュニケーション表現の基礎となる技法、造形の基本原理を学ぶ。その上、ポスターやタイポグラフィ、イラストレーション、パッケージ、ウェブ、エディトリアルなどのテーマに分けて、基礎知識を課題演習により学ぶ授業である。			
授業計画 (担当：官能、坂本、孔、裴) 共通のテーマに基づき課題制作を行う。 第1回 テーマに基づき教員による講義 第2回 テーマに基づき教員による講義 (専門分野別の事例紹介) 第3～4回 調査・アイデア構想 第5～6回 デザイン制作 第7回 プレゼン・講評 授業時間外に各自制作を進めること。 (担当：阪口、水田、飯倉) 第1回 情報を編集しデザインとして表現する①「目的・テーマをおさえる」 第2回 情報を編集しデザインとして表現する②「目的・テーマを広く検討する。」 第3回 情報を編集しデザインとして表現する③「検討状況を発表、共有する。」 第4回 情報を編集しデザインとして表現する④「情報を探す・感じる。視点を加える。」 第5回 情報を編集しデザインとして表現する⑤「デザインを企画し発表する。」 第6回 情報を編集しデザインとして表現する⑥「企画を高める。デザインとして表現する。」 第7回 情報を編集しデザインとして表現する⑦「「伝える。(プレゼン・講評)」」			
授業時間外の学習内容等 授業時間外に各自制作を進めること。			
評価方法 教員により異なりますが、授業への取り組み姿勢を 30%、課題成果を 70%で評価し、合計 100%の内 60%以上を単位認定要件とする。			
履修上の注意			
テキスト 特になし。			
参考書・参考資料等 特になし。			

授業科目名	素描表現演習 1 Sketching 1	担当教員名	安藤 康裕、熊谷 晃、森 香織
時間割	水・木・金曜日 1 時限	オフィスアワー	各教員による
授業科目区分	専門科目ー専門共通科目ー導入科目		
履修区分	必修科目	授業形態	演習 (オムニバス)
配当年次・学期	1 年次前期	単位数	2 単位
<p>前提とする授業科目、密接に関係する授業科目 「素描表現 2」と関係している。</p>			
<p>授業に関連するキーワード デッサン、細密描写、観察力</p>			
<p>授業の到達目標及びテーマ この授業では、創作活動の基礎としてのデッサンの意義を伝えるとともに、鉛筆による細密表現を通して、創作に必要な観察力、分析力を強化し、モチーフの細部と全体の関係を感じ取る能力を習得することを目標とする。</p>			
<p>授業の概要 身近な植物をよく観察し、葉書用紙に線描で表現する。 デッサンの創作活動や将来設計における意義をテーマとした講義を行う。 各自が持参したモチーフ（自然物）の構造や特徴を理解するために、スケッチやカメラ撮影を行う。そこで深めた観方を踏まえ、鉛筆による陰影のある細密描写作品を制作する。</p>			
<p>授業計画</p> <p>第1回 ガイダンス (授業の目的、進め方について)</p> <p>第2回～第4回 葉書用紙に植物の細密線描写 ※50枚以上を提出</p> <p>第5回 ケント紙のパネル水張り</p> <p>第6回～第7回 デッサンの実技を伴う講義</p> <p>第8回～第14回 モチーフ (自然物) のスケッチやカメラ撮影等による観察 鉛筆による作品の制作</p> <p>第15回 講評</p> <p>※ 各学生の資質や目標に合わせて計画を変更する事があります。</p>			
<p>授業時間外の学習内容等 事前の予習 (授業準備) を要します。また授業時間内に制作が進まなかった場合は時間外での制作が必要です。</p>			
<p>評価方法 細密描写作品+葉書サイズ線描作品を総合して判断する。</p>			
<p>履修上の注意 デッサン用具、葉書用紙、ケント紙、B3 パネル、水張り用具、拡大鏡を準備する ※葉書用紙、ケント紙、B3 パネルは購買で販売</p>			
<p>テキスト なし</p>			
<p>参考書・参考資料等 なし</p>			

授業科目名	塑造彫刻表現 1 Sculpture 1	担当教員名	皆川 嘉博
時間割	水、木、金曜日 1 時限	オフィスアワー	火曜日 2 時限、水曜日 2 時限
授業科目区分	専門科目—専門共通科目—導入科目		
履修区分	選択科目	授業形態	演習
配当年次・学期	1 年次前期	単位数	2 単位
前提とする授業科目、密接に関係する授業科目 特になし			
授業に関連するキーワード 基礎教育、塑造、立体、人体モデル、テラコッタ技法			
授業の到達目標及びテーマ 塑造の基本的技法の把握と、テラコッタかき出し技法を修得する。本授業によって、人体の基本的な構造や量塊への理解を深め、対照を把握するための観察力と表現力を養うことを到達目標にする。			
授業の概要 人体モデルの頭部（首像）を造る。ただし、アイモデル（学生同士の造り合い）になる場合もある。塑造からの「テラコッタかき出し技法」を修得し、その後 700℃酸化焼成し、テラコッタ彫刻にする技法を修得する。作品完成後、プレゼン・講評をする。			
授業計画 第1回 ガイダンス。クロッキー・デッサン。 第2回 クロッキー・デッサン（芯棒制作） 第3回 首像制作（粘土荒付け） 第4回 首像制作（粘土荒付け） 第5回 首像制作（全体の量感、バランスをとる） 第6回 首像制作（全体の量感、バランスをとる） 第7回 首像制作（モデルを良く観察し、造り込む） 第8回 首像制作（モデルを良く観察し、造り込む） 第9回 首像制作（仕上げの造り込み） 第10回 首像制作（仕上げの造り込み） 一採点① 第11回 テラコッタ技法（テラコッタ粘土かき出し） 第12回 テラコッタ技法（テラコッタ粘土かき出し、修正） 第13回 テラコッタ技法（修正・乾燥） 第14回 テラコッタ作品焼成（800℃酸化焼成） 窯だし・修正 <アイモデルのクロッキーをする> 第15回 テラコッタ彫刻・クロッキーをプレゼンテーション、講評。一採点② ※ 授業時間外に各自制作を進めること。			
授業時間外の学習内容等 塑造室で空き時間を利用して、クロッキーを参考にしながら塑像制作をすることで塑造力や立体把握能力を養う。			
評価方法 作品の採点①②それぞれ 100 点満点で採点し、平均点と授業態度を考慮して学生の成績とする。（クロッキー・デッサンは②の採点時に考慮する。） 作品点数 60 点以上を単位認定要件とする。			
履修上の注意 制作に適した服装（作業着）。初日、鉛筆デッサン用具・クロッキー帳（B3 サイズ）を持参すること。消耗品の材料費が必要です：テラコッタ粘土代、等。 技術講師が指導の補助を行なう。			
テキスト 技法についてのプリントを配布する予定。			
参考書・参考資料等 「彫塑—制作と技法の実際」 「新技法シリーズ テラコッタの技法」 塑造彫刻関係の作品集			

授業科目名	色彩論 Chromatics	担当教員名	金 孝 卿
時間割	金曜日 2 時限	オフィスアワー	
授業科目区分	専門科目—専門共通科目—導入科目		
履修区分	必修科目	授業形態	講義
配当年次・学期	1 年次前期	単位数	2 単位
前提とする授業科目、密接に関係する授業科目			
授業に関連するキーワード 色彩調和論・配色のイメージ・ビジュアルデザインと色彩・ファッションと配色 プロダクトデザインと色彩・インテリアの配色・エクステリア環境と色彩・色彩計画			
授業の到達目標及びテーマ 当たり前のように、見ている色を感覚的に好き・嫌い判断して作品に取り入れることは、美術やデザインの専門家としては都合が悪い。赤い色が好きな人がいれば、嫌いな人もいるため、色彩基礎理論を通して「いかにして赤を美しく見せる」かを頭の中で理解し、整理するとともに、論理的で科学的に捉えられる色彩学の深い理解を得ることを目標とする。			
授業の概要 色彩の科学的システムによる色彩学における基礎理論と、生活環境、造形制作や様々なデザインに実践的に生かせる色彩（配色）効果、色彩調和などについて学ぶ。創作活動における最低必要と考えられる基本的な造形要素として、視覚的效果と心理的效果、知覚的效果、配色技法などを理解する。センスが良し悪しと感じる仕組みを感覚で捉えるだけでなく、論理的に考え、理屈を理解し、実際の造形現場で役に立つ色彩の全般について習得する。			
授業計画 第1回 オリエンテーション：色彩を学ぶ事について 第2回 色のはたらき：色のイメージ 第3回 光と色・光の性質と色 ・眼の仕組み・照明と色 第4回 混色：加法混色・減法混色 第5回 色の表示：色の分類と三属性 第6回 色立体：PCCS・マンセルシステム・オストワルド 第7回 色相とトーン分類 第8回 言葉による色表示：色名 第9回 色彩心理：色の心理的效果・色の連想・象徴性・イメージカラー第 10回 色の視覚効果：負の残像・色対比・同化効果・色陰現象・面積効果第 11回 色の知覚的效果：色の錯視 第12回 色彩調和：配色の技法 第13回 色相の配色・トーンの配色 第14回 色彩効果：色彩と構成・色彩検討 第15回 色彩と生活 期末定期試験			
授業時間外の学習内容等 色彩理論の理解度を測るために、毎回授業中に配布する問題を解いてみることで授業内容を振り返り、理解を深める。			
評価方法 小テスト 30%、期末定期試験 70%とで総合的に評価し、60 点以上を単位認定要件とする。			
履修上の注意 授業に必要な教材や画材を必ず用意し、受講する事。 授業は1回完結が基本として、欠席した場合は補充がきかないので注意すること。			
テキスト 指定の教科書を使用する。 新配色カード 199a：切り貼り等簡単な演習と、配色を確認するために必要。 ハサミ、カッター、のり、定規等：毎回ではないが、その都度使用。			
参考書・参考資料等 日本色研事業「色彩・色彩検定」・デジタル教材 マンセル表色系・PCCS の色立体・トーン概念図・基本色彩掛図「色感テスト／配色集」			

授業科目名	図学と製図 Drawing and Drafting	担当教員名	井上 宗則
時間割	木曜日 4 時限	オフィスアワー	—
授業科目区分	専門科目－専門共通科目－導入科目		
履修区分	選択科目	授業形態	演習
配当年次・学期	1 年次後期	単位数	2 単位
前提とする授業科目、密接に関係する授業科目			
授業に関連するキーワード			
授業の到達目標及びテーマ <p>図学は、科学的・幾何学的な手法を通して、形態を考察・研究する学問です。授業では主に、造形の視点から様々な平面図形や各種立体・空間を取り上げ、基本的なスケッチや手描きによる作図を通して、それらの形態の性質、作図法、表示法を考えていきます。実際に手を動かす演習を通して、様々な図形・形態や空間について考え理解すること、自分の思考を製図によって表現し伝達するコミュニケーション手法を身につけることが目的です。</p>			
授業の概要 <p>図学の概説と製図用具の説明から始まり、各回とも講義と演習を随時おりまぜて授業を行います。基本的な平面図学から投影図を中心とした立体図学、そして綿密で正確な製図技術へと回数を重ねるごとに理解を深めていきます。</p>			
授業計画 第 1 回：ガイダンスー図学の歴史や製図の目的など 第 2 回：平面ー直線および円弧 第 3 回：平面ー円錐曲面、楕円、双曲線、放物線、うずまき線 第 4 回：立体／多面投影ー投影、正投影、副投影、回転法、多面体、曲面 第 5 回：立体／多面投影ー切断、相貫、展開図、陰影、輝点 第 6 回：立体／透視投影ー斜投影、軸測投影、標高投影 第 7 回：立体／透視投影ー測点法、斜角消点法、陰影など 第 8 回：製図ー線・文字など 第 9 回：製図ー製図に用いる記号・尺度など 第 10 回：製図ー寸法記入、図示方法など 第 11 回：製図ー面肌の図示、文章、記号など 第 12 回：製図ー図面様式など 第 13 回：製図ー設計課題 1 第 14 回：製図ー設計課題 2 第 15 回：製図ー設計課題 3			
授業時間外の学習内容等			
評価方法 課題の成果 60% レポート 40%			
履修上の注意 作図用具（定規、コンパスなど授業内で指示）と用紙は、各自で準備してきて下さい 授業時間以外の作業が必要な場合があります 進行状況などにより内容は適宜変更します			
テキスト 『わかりやすい図学と製図』住野和男、オーム社			
参考書・参考資料等 随時紹介			

授業科目名	コンピュータデザイン基礎 Basic Computer Design	担当教員名	孔 鎮烈、阿部 由布子、 清水 悠一郎
時間割	水曜日 2、3 時限	オフィス	各教員による
授業科目区分	専門科目—専門共通科目—導入科目		
履修区分	選択科目	授業形態	演習
配当年次・学期	1 年次前期	単位数	2 単位
前提とする授業科目、密接に関係する授業科目 コンピュータデザイン演習、コミュニケーションデザイン演習			
授業に関連するキーワード Mac OS, アドビ・イラストレーター, アドビ・フォトショップ			
授業の到達目標及びテーマ Mac OS の基礎知識とアドビ・イラストレーター, アドビ・フォトショップの基本操作について、レッスンを重ねながら操作スキルの習得を目指す。また、基礎的なデザイン課題への取り組みによって、今後の創作活動のための積極的活用につなげる。			
授業の概要 トレースやドローイング、ペインティング、画像加工などの基本機能に基づくレッスンを行い、それらを踏まえたデザイン課題制作によって操作スキルを着実に習得する。			
授業計画 第 1 回 オリエンテーション/イラストレータの基本レッスン 第 2 回～第 3 回 アドビ・イラストレータの基本レッスン 第 4 回～第 5 回 イラストレータを用いたデザイン課題 1 第 6 回 デザイン課題 1 の講評 第 7 回～第 9 回 フォトショップの基本レッスン 第 10 回～第 11 回 フォトショップを用いたデザイン課題 2 第 12 回 デザイン課題 2 の講評 第 13 回～第 14 回 イラストレータとフォトショップを複合的に用いたデザイン課題 3 第 15 回 デザイン課題 3 の講評/授業のまとめ 各デザイン課題は授業時間外に各自制作を進めること。			
授業時間外の学習内容等 授業中に配布するテキストを基に復習を行い、理解を深めること。また、複数回の課題制作が必要になる。			
評価方法 授業態度を 60%、課題を 40%で評価し、合計 100%の内 60%以上を単位認定要件とする。			
履修上の注意 Mac OS、イラストレータ及びフォトショップに関する未経験者を主な対象とする。 USB メモリー等の保存メディア(4GB 以上を推奨)を用意する事。			
テキスト 授業内で適宜配布する。			
参考書・参考資料等 授業内で適宜紹介する。			

授業科目名	建築環境・設備 Building Environment and Equipment	担当教員名	井上 誠
時間割	金曜日 5 時限	オフィスアワー	—
授業科目区分	専門科目－専門共通科目－導入科目		
履修区分	選択科目	授業形態	講義
配当年次・学期	1～4 年次前期	単位数	2 単位
前提とする授業科目、密接に係る授業科目			
授業に関連するキーワード			
授業の到達目標及びテーマ 建築環境を支える設備に関して、基礎的な認識を培い、基本的な仕組み、構成を理解する。 1. 建築における諸設備について基本的な理解を得る。 2. 基本的な設備について具体的に理解し、設備の選択や計算ができるようになる。			
授業の概要 講義形式で行なう。必要に応じて適宜小テストを実施する。演習問題、レポート、宿題を課す場合もある。			
授業計画 第1回： 授業ガイダンス 第2回： 空調方式 第3回： 冷凍機と冷却塔，送風機とダクト 第4回： 熱交換器，換気設備 第5回： 空気の状態変化，給水設備 第6回： 給湯設備，衛生器具，排水・通気設備 第7回： 排水処理・排水再利用，ガス設備，配管材料，集合住宅の給排水設備 第8回： 受変電設備，契約電力 第9回： 電気配線，動力設備，照明設備 第10回： 情報通信設備，避雷設備，搬送設備 第11回： 発電設備，蓄電池，室内気候と気象 第12回： 省エネルギー手法 第13回： 省エネルギー基準，CASBEE，エネルギー消費の実態，保全・管理 第14回： 消防設備，防災設備，防犯設備，バリアフリー設備 第15回： 到達度試験			
授業時間外の学習内容等			
学生に対する評価 総合評価は、到達度試験の結果を全体の 70%とし、課題や小テスト等の結果を 30%として総合的に行なう。特に、課題の未提出者は単位取得が困難となるので注意すること。総合成績（100 点満点）＝試験成績（100 点満点×0.7=70 点）＋課題・小テスト等（30 点満点）			
履修上の注意 （講義を受ける前）事前に講義範囲（図・表含む）を通読しておくこと。 （講義を受けた後）指定された提出期限は厳守すること。			
テキスト 「図とキーワードで学ぶ 建築設備」飯野秋成，学芸出版社			
参考書・参考資料等 「ゼロからはじめる建築の「設備」教室」原口秀昭，彰国社			

授業科目名	建築構造 Building Construction	担当教員名	寺本 尚史
時間割	金曜日 4 時限	オフィスアワー	—
授業科目区分	専門科目—専門共通科目—導入科目		
履修区分	選択科目	授業形態	講義
配当年次・学期	1・2・3・4年次前期	単位数	2単位
前提とする授業科目、密接に関係する授業科目			
授業に関連するキーワード 力学、荷重、反力、応力、変形、せん断力、曲げモーメント、座屈			
授業の到達目標及びテーマ 構造力学に関し、基礎的な知識を修得することを目標とする。具体的には、単純梁など梁の支点における反力を求め、部材内に生じる力や断面の性質がどのように表されるのかを、理論的に理解することを目標とする。			
授業の概要 構造力学は、安全な建築物がどのように造られ、また設計されているかを理解するための基礎となるものである。本授業では、構造力学の基礎を学ぶことで、部材にどのような力が生じるのかを勉強する。			
授業計画 第1回： 授業ガイダンス 第2回： 力の基礎 第3回： 力のつりあい 第4回： 反力1（単純梁・片持ち梁の反力） 第5回： 反力2（ラーメンの反力） 第6回： 部材に生じる力1（梁に生じる力） 第7回： 部材に生じる力2（単純梁に生じる力） 第8回： 部材に生じる力3（せん断力図を描く方法） 第9回： 部材に生じる力4（曲げモーメント図を描く方法） 第10回： トラスの考え方 第11回： 図面に関する数量1（図心） 第12回： 図面に関する数量2（断面二次モーメント） 第13回： 図面に関する数量3（断面係数） 第14回： 応力度およびひずみ度の考え方 第15回： 座屈の考え方（断面二次半径）			
授業時間外の学習内容等			
評価方法 試験(70%)および課題・レポート(30%)により評価し、60点以上を合格とします。			
履修上の注意 講義形式で行い、適宜、課題やレポートの提出を求めます。			
テキスト 「図説 やさしい構造力学」、浅野清昭 著、学芸出版社			
参考書・参考資料等			

授業科目名	建築生産 Building Production	担当教員名	鎌田光明
時間割	木曜日 3 時限	オフィスアワー	
授業科目区分	専門科目－専門共通科目－導入科目		
履修区分	選択科目	授業形態	講義
配当年次・学期	1～4 年次前期	単位数	1 単位
前提とする授業科目、密接に関係する授業科目			
授業に関連するキーワード			
授業の到達目標及びテーマ 建築物の建設は、他のプロダクトと比較しても大規模で、様々な専門職種の技術者が関わり、管理されている。そこで、建築生産に関する一連の流れを理解するものとし、具体的には建築生産について仕組みを理解し、他の産業との比較ができること。また、実際の施工分野においてどのようなプロセスで、どのような技術者が関わっているのか説明できること。生産に関わる制度や管理について説明できることを目標とする。			
授業の概要 建築物は、企画・計画、設計、施工、維持・管理といった一連の流れで建設される。プロダクトの中でも最も大規模と言える建築物は、こうした一連の流れに対して様々な専門職種の技術者が関わり、管理されている。こうした建築物の建設に対して生産の観点から学ぶ。			
授業計画 第1回：授業ガイダンス 授業の内容と進め方について 第2回：建築生産の仕組みについて 第3回：プロダクトとしての建築について 第4回：施工に関する準備と計画について 第5回：仮設工事や施工に関する技術について 第6回：躯体を含む施工に関する技術について 第7回：品質管理・維持管理について 第8回：学習の到達度について確認する			
授業時間外の学習内容等			
評価方法 到達度試験(60%)および課題・レポート(40%)により評価し、60 点以上を合格とする。			
履修上の注意 講義形式で行う。必要に応じてレポートなどを課す場合がある。 生産のプロセスについて理解すること。			
テキスト			
参考書・参考資料等			

授業科目名	建築法規 Building Codes and Regulations	担当教員名	鎌田 光明
時間割	木曜日 3 時限	オフィスアワー	
授業科目区分	専門科目－専門共通科目－導入科目		
履修区分	選択科目	授業形態	講義
配当年次・学期	1～4年次前期	単位数	1 単位
前提とする授業科目、密接に関係する授業科目			
授業に関連するキーワード			
授業の到達目標及びテーマ 建築物を計画・建設する上では対応する各種法律があり、特に建築基準法に関する内容を理解し、実際の計画に活かす知識を修得するものである。具体的には、建築基準法の意義を理解し、制度の内容・用語を説明出来る。単体規定について、内容や対応する寸法を説明出来る。集団規定について、内容や対応する寸法を説明出来ることを目標とする。			
授業の概要 住宅や学校、病院などの様々な建築物が建築基準法をはじめいくつもの法的基準を尊重し建設されることで、人々の安全かつ衛生的生活が成り立っている。本授業ではこれら建築に関連する法律を学ぶ。			
授業計画 第1回：授業ガイダンス 授業の内容と進め方について 第2回：建築基準法の目的や用語について 第3回：建設関連法や手続きについて 第4回：単体規定 採光や換気、一般構造について 第5回：単体規定 防火や避難について 第6回：集団規定 防火に関する地域・構造・区画について 第7回：集団規定 用途地域や容積率・建ぺい率、高さ規定について第 8回：学習の到達度について確認する			
授業時間外の学習内容等			
評価方法 到達度試験(60%)および課題・レポート(40%)により評価し、60 点以上を合格とする。			
履修上の注意 講義形式で行う。必要に応じてレポートなどを課す場合がある。 また、法律特有の表現に注意し、根気よく読むことがポイントである。			
テキスト 「図解 建築法規」、小嶋和平 著、学芸出版社			
参考書・参考資料等			

授業科目名	素描表現演習 2 Sketching II	担当教員名	熊谷 晃 安藤 康裕 森 香織
時間割	金曜日 5 時限	オフィス	各教員による
授業科目区分	専門科目-専門共通科目-導入科目		
履修区分	選択科目	授業形態	演習
配当年次・学期	1 年次後期	単位数	2 単位
前提とする授業科目、密接に関係する授業科目 全ての演習			
授業に関連するキーワード 「デッサン」「観察力」「形体把握」「空間把握」「主体性」			
授業の到達目標及びテーマ 垂直、水平、遠近法など写実的描写に必要な基礎知識を体感し、重力と空間の意識を高め、創作活動に役立つ観察力、空間認識力を強化する。デザイン、アート表現における創作活動と素描の関係を学習する。			
授業の概要 振り子、水平面、方眼等の描画の手がかりになる要素を加えた石膏像や静物モチーフを鉛筆で写実的に描写する。最後に学習したことを意識しながら写実表現による静物素描を行う。モチーフごとに学習の意図を解説し、講評を行う。授業中適宜指導を行う。			
授業計画			
第 1 回	ガイダンス 石膏像をモチーフにしたデッサン	意図説明	描 画
第 2 回	石膏像をモチーフにしたデッサン		描 画
第 3 回	石膏像をモチーフにしたデッサン		講 評
第 4 回	石膏像 + α をモチーフにしたデッサン	意図説明	描 画
第 5 回～6 回	石膏像 + α をモチーフにしたデッサン		描 画
第 7 回	石膏像 + α をモチーフにしたデッサン		講 評
第 8 回	水平・垂直・遠近を意識した静物デッサン	意図説明	描 画
第 9 回～10 回	水平・垂直・遠近を意識した静物デッサン		描 画
第 11 回	水平・垂直・遠近を意識した静物デッサン		講 評
第 12 回	大型モチーフによる静物デッサン	意図説明	描画
第 13 回～14 回	大型モチーフによる静物デッサン		描画
第 15 回	大型モチーフによる静物デッサン		講評
授業時間外の学習内容等 素描に必要な感覚のトレーニングとして授業時間以外も各自が主体的に制作する事が必要である。			
評価方法 提出作品 100%			
履修上の注意 デッサン用具、木炭紙サイズ画用紙、クロッキー帳を用意すること。 履修希望者が多数の場合は、履修制限する場合があります。			
テキスト 必要に応じてプリントを配布する。			
参考書・参考資料等 なし			

授業科目名	描画材料演習 Art Materials and Supplies	担当教員名	鈴木 司
時間割	水曜日 2 時限	オフィスアワー	火曜日 1 時限 要予約
授業科目区分	専門科目—専門共通科目—導入科目		
履修区分	選択科目	授業形態	演習
配当年次・学期	1 年次後期	単位数	2 単位
前提とする授業科目、密接に関係する授業科目 「絵画技法演習（教職課程）」と内容が関連している。			
授業に関連するキーワード 絵画材料、材料体験、描画用具、描画技法、絵画史			
授業の到達目標及びテーマ 各種描画材料を成分と製造方法から比較し、材料体験から、今後に生かせるサンプル資料作成をする。材料体験の経験生かし、より確実に絵画史と絵の具、描画用具、描画技法などの関係を知り、描画材料の使い方を修得する。			
授業の概要 描画材料の知識を学び、描画材料のサンプルファイル作りと作品制作を行う演習授業。実際に各種画材使う体験をし、サンプルファイルを作成する。数種類の画材や描画方法を選び、作品制作する。授業時間外に各自制作を進める事。			
授業計画 第 1 回 目標、全体課題、日程説明。材料説明。下地作製準備。A4 用紙準備。 第 2 回～第 1 0 回 下地材質（板、布、紙）。ジェッソ、モデリングペースト下地作り。 下地表現（ナイフ、刷毛、ローラー、スポンジ）。 下地マチエル（粗粒子、微粒子、タルク、パルプ）。 顔料系（パステル、コンテ、粉末顔料）。サンプル制作。 日本画絵の具、箔。顔料サイズと色。 簡易テンペラ（卵、牛乳）、色鉛筆、クレヨン。 染料系（マーカー、食紅、紅茶、水彩色鉛筆）、エイジング。 水彩・アクリル（透明と不透明）。絵の具作り。 学童用画材（安全性と素材）、接着成分。バブリング。 第 1 1 回～第 1 5 回 課題：描画材料いかしたA4作品制作。油彩画、油絵の具。 フレスコ。ファイル確認。版画。 課題：描画材料いかしたA4作品制作。A4ファイル確認。 ミクストメディア。重ね、混合表現。 屋内と屋外表現の画材。提出 （定期試験） 課題作品提出			
授業時間外の学習内容等 授業の掲示物、参考作品を見て、資料調べや復習をする。 課題提出や授業内制作のための事前準備や授業時間外制作が必要になる。			
評価方法 演習作品 90%、受講態度等 10%で評価し、60 点以上を単位認定要件とする。			
履修上の注意 履修希望者が教室の設備空間を越える場合、選抜を行う。選抜は、教職進路者、総合成績の順。 絵の具、描画用具一式、各自準備。			
テキスト 授業中に解説資料プリントを適宜配布する。			
参考書・参考資料等 制作過程資料。参考作品。			

授業科目名	色彩基礎演習 Basic Coloring	担当教員名	金 孝 卿
時間割	火曜日 5 時限	オフィスアワー	
授業科目区分	専門科目—専門共通科目—導入科目		
履修区分	選択科目	授業形態	演習
配当年次・学期	1 年次後期	単位数	2 単位
前提とする授業科目、密接に関係する授業科目 色彩論を前提とする。構成論・描画材料演習			
授業に関連するキーワード 色彩構成・平面構成・色彩心理・コンポジション・レイアウト・抽象的幾何学的な形態			
授業の到達目標及びテーマ 実際のデザイン現場やコーディネートの中で用いる色と色の関係は、我々が考える以上に複雑でありつつ魅力をもっている。配色といっても色だけを考えるのではなく、形態などの様々な造形要素を色と組み合わせながら構成する必要がある。形（モチーフ）、配置、構図、イメージ表現など、様々な表現における基礎的要素を習得し、あらゆる制作に活かせる色彩感覚を高めることを目標とする。 最終的には、授業成果として「色彩構成」の展示発表を行う。			
授業の概要 色材道具の理解と、絵具の効果的な混ぜ方法、配色技法などを理解し、視覚的效果と色彩心理を生かした色彩構成演習を行う。その上にレイアウト、バランスなどに関連付けながら、色彩知覚と形態知覚について深めていく。様々な造形制作やデザインワークの現場で求められる配色感覚・色彩能力などを身につける。			
授業計画 第 1 回 目標・テーマ説明・材料の説明 第 2 回 色彩構成の参考作品解説 第 3 回 温度感覚：暖感・寒感の表現 第 4 回 軽重感：軽感・重感の表現 第 5 回 動静感：硬感・柔感の表現 第 6 回 季節感：季節の表現 第 7 回 立体感：立体の表現 第 8 回 授業成果展の計画と事例作品の紹介 第 9 回 アイデアの発想について 第 10 回 アイデアスケッチの検討① 第 11 回 アイデアスケッチの検討② 第 12 回 制作① 第 13 回 制作② 第 14 回 制作③ 第 15 回 まとめ			
授業時間外の学習内容等 授業終了までの未完了の課題は、授業時間外に制作を行い、次回授業時に完成品を提出する。			
評価方法 制作作品 70%、授業に取り組み状況 30%とで評価し、60 点以上を単位認定要件とする。			
履修上の注意 授業に必要な画材を必ず用意し、受講すること。 着彩用具一式、アクリルガッシュ、デザイン筆セット、マスキングテープ、クロッキー帳、鉛筆、定規等を準備する。			
テキスト その都度、資料を配布する。			
参考書・参考資料等 日本色研事業「色彩・色彩検定」・デジタル教材、基本色彩掛図「色感テスト／配色集」 朝倉直巳「平面構成」・「色彩構成」六耀社			

授業科目名	構成論 Theory of Art and Design	担当教員名	金孝卿
時間割	金曜日 2 時限	オフィスアワー	
授業科目区分	専門科目—専門共通科目—導入科目		
履修区分	選択科目	授業形態	講義
配当年次・学期	1 年次後期	単位数	2 単位
前提とする授業科目、密接に関係する授業科目 図学と製図・デザイン史・近代絵画史			
授業に関連するキーワード 構成概論・構成原理・構成発想論・造形心理			
授業の到達目標及びテーマ 構成原理を理解することにより、著名な画家およびデザイナーたちが制作に至った発想や目的、また創作のプロセス、構想の仕組み、意図の展開などが推測できる。構成に関する専門的な知識を生かし、様々な美術作品やデザインを見る（鑑賞）際、その対象物における長所・短所が評価できる高度の感覚を養い、表現力・造形力を向上させることを目標とする。			
授業の概要 構成とは、あらゆる造形に共通する色彩・形態・テクスチャなどについて、理論および実技を通して専門的に多角的に研究する領域である。造形(デザイン)活動における基礎的で重要な問題である形態や色彩のアプローチとして、造形要素と造形秩序について習得する。授業では、内容に沿った映像物を用い、事例をあげながら構成理論の全般について解説する。			
授業計画 第1回 構成の位置づけと背景 第2回 形態の知覚：図と地第 3回 形態の心理：錯視 第4回 形態の種類：分類と特徴 第5回 造形要素：点 第6回 線 第7回 面 第8回 材料 第9回 テクスチャ・光 第10回 造形秩序：シンメトリー 第11回 バランス 第12回 リズム 第13回 プロポーション 第14回 コンポジション 第15回 コントラスト・ハーモニー・ユニティ 定期期末テスト			
授業時間外の学習内容等 配布した教材には、授業内容に沿った簡単な演習が添付されているので、次の授業まで完成して理解を深める。			
評価方法 定期期末テスト 70%、授業の取り組み状態 30%とで総合的に評価し、60 点以上を単位認定要件とする。			
履修上の注意 授業は一回完結を基本とする。 欠席した分は補充がきかないので、注意すること。			
テキスト 独自で作成した教材を 1 回授業の際に配布する。欠席した場合には、2 回授業前に手に入れ持参する。毎時、授業内容に応じた映像物			
参考書・参考資料等 (株) 日本グラフィックデザイナー協会教育委員会編 ビジュアルデザイン「平面・色彩・立体構成」			

授業科目名	デザイン演習入門 Introduction of design exercise	担当教員名	水田圭
時間割	木曜日 1 時限	オフィス	月・金 3 時限、火・木 2 時限、水 4 時限
授業科目区分	専門科目－専門共通科目－導入科目		
履修区分	選択科目	授業形態	演習
配当年次・学期	1 年次後期	単位数	2 単位
前提とする授業科目、密接に関係する授業科目 立体造形基礎演習			
授業に関連するキーワード 「デザイン」「コミュニケーションデザイン」「生活」「工芸」「プロダクトデザイン」			
授業の到達目標及びテーマ デザインに限らず創造活動の基盤として重要な「完成度を高める」「諦めない」「自の限界を知り、引き上げる」「感動体験を大切にす」意識を獲得し、その意識の基にデザインプロセスを通して「他者への理解」と「自身の視点」そしてその融合の重要性を感得。また、調査分析結果をもとに、共感を生む生活シーンを構想し、わかりやすく表現出来る事。感動体験や提案内容をグループ内で相互に発表し、わかりやすく建設的な意見交換が出来る事も目標とする。			
授業の概要 前半では、表現と思考の幅及びその質を高めると同時に「完成度を追求する」意識を高める為に、「思考」と「手技」を一致させる訓練を反復する。中盤では「自身が何に感動するのか」を徹底的に探求する。前半及び中盤の訓練と探求を活かし、後半では、デザイン提案プロセスに従いながら実際にデザイン提案を行う。共感を生む生活シーンと、シーンを構成するデザインアイテムを構想し、文章とスケッチ等で実在する生活者にデザイン提案を行う。各プロセスをとことんまで拘って実行する事で質が高まる事を学ぶ			
授業計画 第 1 回 : ガイダンス ・ 課題 A 「完成度 1」手法ガイダンス。 第 2 回 : 課題 A—1 提出講評 ・ 課題 A 「完成度 2」手法ガイダンス。 第 3 回 : 課題 A—2 提出講評 ・ 課題 A 「完成度 3」手法ガイダンス。 第 4 回 : 課題 A—3 提出講評 ・ 課題 A 「完成度 4」手法ガイダンス。 第 5 回 : 課題 A—4 提出講評 ・ 課題 A 「完成度 5」手法ガイダンス。 第 6 回 : 課題 A—5 提出講評 ・ 課題 A 「完成度 6」手法ガイダンス。 第 7 回 : 課題 A—6 提出講評 後半 前半課題の総評 第 8 回 : 課題 B 「デザイン提案」手法ガイダンス 第 9 回 : 提案相手の生活実態と特性の確認とまとめ。課題 B 「Target Profile」の提出。 第 10 回 : 提案する生活シーンやデザインアイテムのアイデア展開。課題 B 「Scenario」の提出。 第 11 回 : スケッチ主体でまとめた提案内容を提案相手に見せて意見を聞く。課題 B 「Sketch」の提出。 第 12 回 : 提案相手の意見と既存事例比較から、受容性と独自性を検証する。課題 B 「Mapping」の提出。 第 13 回 : 最終的な提案の基本方針とデザインをまとめる。課題 B 「Concept & Design Image」を提出。 第 14 回 : デザイン提案を学生が相互に閲覧・評価する。評価を記入した「投票用紙」を提出。 第 15 回 : 投票結果から、得票上位 5 人程度が提案内容のプレゼンテーションを行う。総評。			
授業時間外の学習内容等 毎回出される小課題を時間外に制作提出し、時間内に評価を受けることが前提となる。 毎回の提出作品および発表の水準。技術習得への工夫などを総合的に評価する			
評価方法 各課題の提出とその点数(評価点)の合算を最終評価とします。			
履修上の注意 F 4 スケッチブックと A 3 コピー用紙 (1 束) と描画材 (鉛筆・色鉛筆・その他)。その他材料費が別途必要。			
テキスト 必要に応じて資料を適宜配布します。			
参考書・参考資料等 必要に応じて資料を適宜配布します。			

授業科目名	コンピュータデザイン演習 Computer Design Seminar	担当教員名	坂本 憲信, 阿部 由布子, 清水悠一郎
時間割	月曜日 1 時限、金曜日 3 時限	オフィスワ	各教員による
授業科目区分	専門科目－専門共通科目－導入科目		
履修区分	選択科目	授業形態	演習
配当年次・学期	1 年次後期	単位数	2 単位
前提とする授業科目、密接に関係する授業科目 コンピュータデザイン基礎			
授業に関連するキーワード Mac OS, アドビ・イラストレーター, アドビ・フォトショップ			
授業の到達目標及びテーマ 「コンピュータデザイン基礎」において学んだアドビ・イラストレータおよびフォトショップの基本操作について、更なる習熟を目指す。			
授業の概要 作画・レイアウト・文字組み・画像加工・色調補正等、専門的なデザインワークを展開する上で最低限度必要な知識と操作スキルの理解について、デザイン課題制作への取り組みを通じて着実に習得する。			
授業計画 第 1 回 オリエンテーション／課題①「ピクトグラム」の概要説明 第 2 回 作画レッスン／課題①の制作 第 3～4 回 課題①の制作 第 5 回 課題①の講評／課題②「名刺」の概要説明 第 6～7 回 作画レッスン／課題②の制作 第 8 回 課題②の講評／課題③「ポストカード」の概要説明 第 9～10 回 作画レッスン／課題③の制作 第 11 回 課題③の講評／課題④「スライドショー」の概要説明 第 12～13 回 作画レッスン／課題④の制作 第 14 回 課題④の講評／授業⑤「ポートフォリオ」の概要説明 第 15 回 課題⑤の講評／授業のまとめ 各課題内容の詳細は授業時に説明する。 諸事情により一部の課題内容を変更する場合がある。 各課題は授業時間外においても各自制作を進めること。			
授業時間外の学習内容等 「コンピュータデザイン基礎」（1 年前期）の履修内容を振り返り、習得した PC ツール操作技法について再確認しておくこと。			
評価方法 授業態度を 60%、課題を 40%で評価し、合計 100%の内 60%以上を単位認定要件とする。			
履修上の注意 ・「コンピュータデザイン基礎」の単位を取得しているか、それと同等の操作スキルを有すること。 ・USB メモリー等の保存メディアを用意すること。			
テキスト 授業内で適宜配布する。			
参考書・参考資料等 授業内で適宜紹介する。			

授業科目名	工芸演習 A (教職課程) 実 Craft Exercise A: Foundations of Metal Crafts (Teacher Training Course)	担当教員名	尾澤 勇
時間割	火曜日 3 時限	オフィスアワー	
授業科目区分	教養科目 教科及び教科の指導法に関する科目 (美術 工芸)		
履修区分	教員の免許状取得のための必修科目	授業形態	演習
配当年次・学期	1 年次後期	単位数	2 単位
前提とする授業科目、密接に関係する授業科目			
「工芸科教育法概論」「工芸科指導法」「美術科教具・教材研究演習」と内容が関連している。			
授業に関連するキーワード			
鍛金、金属工芸、加工硬化と焼鈍、接合、安全			
授業の到達目標及びテーマ			
本授業では、「金属」を使った作品の制作を通して、教職に必要な基礎的な技能や授業開発の基礎を身に付けることを目標としている。工芸作品を制作する過程を重視しアイデアを展開する力や制作意図を人に伝える力、完成までこだわりをもって仕上げる意識を育てる。			
授業の概要			
中学校と高等学校での美術科、芸術（工芸）授業の実務経験で得た実際の知見を基に、この授業において工芸の教材開発や金属工芸の指導における留意点など、理解を深める指導内容としている。 学校の現場で用いられている「金属」を使った作品の制作を行う。学校教育で生徒が制作を行うことを念頭に作品制作をおこなう。制作にあたってはアイデアを展開し、金属素材の特性を実感的に理解しながら、加工方法、接合方法、着色仕上げ方法などを研究する。金属工芸に必要な道具を使い分け制作する。そこでは素材を生かす道具等の特徴や扱い方、安全な指導について学ぶ。また 制作を通して企画書・資料等を作成し、指導を行う視点で制作過程を振り返る。			
授業計画			
第 1 回	ガイダンス (課題内容、スケジュール、使用する素材の特徴について説明)		
第 2～3 回	[課題 1]アルミの打ち込み象嵌皿のアイデアスケッチを行い、デザインを決める。		
第 4 回	企画書 (図面・コンセプトなど) を作成する。		
第 5 回	外形を切り出し、象嵌を行う。		
第 6～8 回	形を整え、着色 (硫化・鑑引き) など仕上げを行う。		
第 9 回	[課題 2]カトラリーのアイデアスケッチを行い、デザインを決める。		
第 10 回	企画書 (図面・コンセプトなど) を作成する。		
第 11 回	板金に形を転写し、金切り鋏や手引き糸鋸で形を切り出す。		
第 12 回	金鋸で成形したり、柄を接合 (鑑付け、リベット止め) したりして制作を行う。		
第 13 回	着色 (研磨・表面処理) など、仕上げを行う。		
第 14 回	企画書を仕上げる。		
第 15 回	課題作品の発表及び講評を行う。		
授業時間外の学習内容等			
授業中に配布する資料を読むことで授業を振り返り、理解を深める。また、授業内作業のための事前準備が必要になる。授業内での授業の振り返りをポートフォリオとして教職の視点にたって分析し、まとめる。			
評価方法			
課題作品及び制作プロセスの把握・工夫 (制作過程・企画書・完成作品) 50%、授業後のポートフォリオ内容・レポート 30%、授業態度 20% で評価する。			
履修上の注意			
<ul style="list-style-type: none"> ・ 工具や材料等、指定したものを準備する必要がある、3000 円程度実費がかかる。 ・ 20 名を上限に教職履修を希望する学生を優先する。 			
テキスト			
<ul style="list-style-type: none"> ・ 必要に応じて適宜配布する。 			
参考書・参考資料等			
新技法シリーズ 鍛金の実例 (美術出版社)、ベーシック造形技法 (建帛社) 等			

授業科目名	工芸演習 B(教職課程) Industrial Arts B (Education Course)	担当教員名	山岡 惇
時間割	水曜日 4 時限	オフィスアワー	—
授業科目区分	専門科目—専門共通科目—導入科目		
履修区分	選択科目	授業形態	演習
配当年次・学期	1 年次後期	単位数	2 単位
前提とする授業科目、密接に係る授業科目			
授業に関連するキーワード			
授業の到達目標及びテーマ 本授業では、「木材」を使った作品の制作を通して、工芸作品を制作する上で大切な、アイデアを展開する力や制作意図を人に伝える力、きれいにつくる意識を育てることを目標とする。			
授業の概要 学校の現場で広く用いられている「木材」を使った作品の制作を行う。課題に基づきアイデアを展開し、手工具や電動糸鋸機などを使い制作する。その過程で木材の特質や基本的な工具等の特徴や扱い方について学ぶ。			
授業計画 第 1 回 ガイダンス (課題内容、スケジュール、材の特徴について説明)。 第 2 回 課題 1 [ペーパーナイフの制作] アイデアスケッチを行い、デザインを決める。 第 3 回 制作図を作成する。 第 4 回 材に形を転写し電動糸鋸機で形を切り出す。 第 5 回 小刀を使い削る。 第 6 回 やすりで形を整え仕上げの研磨を行う。 第 7 回 塗装を行う。 第 8 回 課題 2 [トレイの制作] アイデアスケッチを行い、デザインを決める。 第 9 回 制作図を作成する。 第 10 回 鑿の仕立てを行う。 第 11 回 材に形を転写し鑿で加工を行う。 第 12 回 電動糸鋸機で形を切り出す。 第 13 回 細部の形を整える。第 14 回 仕上げの研磨を行う。 第 15 回 塗装を行う。課題作品の発表及び講評を行う。			
授業時間外の学習内容等			
評価方法 ・ 課題作品で評価する。60 点以上を単位認定要件とする。			
履修上の注意 ・ 作業に適した服装で履修すること。 ・ 授業外に制作を進めておく必要があります。 ・ 材料費がかかります。また工具など指定されたものを準備する必要があります。 ・ 教室や設備などにより履修定員は 24 名。定員を超えた場合は教員免許状取得予定者を優先し、抽選で調整を行います。			
テキスト ・ 必要に応じて適宜配布する。			
参考書・参考資料等 ・ 基礎技法講座 木工の用具と使い方(美術出版社)			

授業科目名	工芸演習 C(教職課程)	担当教員名	安藤 郁子
時間割	水曜日 4 時限	オフィスワ	
授業科目区分	専門科目—専門共通科目—導入科目		
履修区分	選択科目	授業形態	演習
配当年次・学期	1 年次後期	単位数	2 単位
前提とする授業科目、密接に関係する授業科目			
授業に関連するキーワード			
授業の到達目標及びテーマ 本授業は、陶芸作品の制作を通し工芸が持つ「暮らしを豊かにする力」について理解を深め、工芸作品を制作する基礎的な力を育むことを目標とする。			
授業の概要 陶芸による「茶碗」「花器」の制作を行い、それぞれの使用感について「茶道」の知見を参照しながら検討・分析し、工芸について考察を深める。「茶碗」「花器」は手びねり技法を用いて成形し、施釉の後、焼成をする。課題作品の完成後、合評会(レポート、プレゼンテーション、ディスカッション)を行う。			
授業計画 第 1 回 授業計画および課題制作についてのガイダンス 第 2 回 土を知る(荒練り・菊練り) 第 3 回 「茶道」と「茶碗」についてリサーチ・考察 第 4 回 - 第 5 回 「茶碗」リサーチ・アイディアスケッチ 第 6 回 - 第 8 回 「茶碗」制作 手びねり技法・削り・施釉 第 9 回 「花器」リサーチ・アイディアスケッチ 第 10 回 - 第 12 回 「花器」制作 手びねり技法・削り・施釉 第 13 回 - 第 14 回 課題「茶碗」「花器」の合評会(お茶会) 第 15 回 本授業の総括と補足(レポート・ディスカッション)			
授業時間外の学習内容等 授業時間外に各自制作を進めること。			
評価方法 課題作品 80%、合評会でのレポート 20%で評価し、60 点以上を単位認定要件とする。			
履修上の注意 制作に適した服装で履修すること。材料費(粘土代 500 円程度)を徴収する。			
テキスト 授業中に資料を適宜配布する。			
参考書・参考資料等 なし			

授業科目名	塑造彫刻表現 2 Sculpture 2	担当教員名	皆川 嘉博
時間割	木曜日 3、4 時限	オフィスアワー	
授業科目区分	専門科目—専門共通科目—導入科目		
履修区分	選択科目	授業形態	演習
配当年次・学期	1 年次後期	単位数	2 単位
前提とする授業科目、密接に関係する授業科目 「塑造彫刻表現 1」の履修を前提とする。			
授業に関連するキーワード 塑造、立体、人体裸婦（男性）モデル、テラコッタ技法			
授業の到達目標及びテーマ 人体裸婦モデル（男性ヌードモデル）をモチーフに、塑造表現の技術について指導する。また、テラコッタ（素焼彫刻）の技法を学び、塑造表現をより発展させ作品性を高めることを到達目標にする。			
授業の概要 人体裸婦（男性ヌードモデル）の基本的な量塊や構造を理解するため、クロッキー・人体裸婦デッサンなどを経て、芯棒を造り、塑造をする。二分の一全身像を予定（変更する可能性もあり）。塑造によって仕上がった作品は、テラコッタ技法により焼成し完成する。			
授業計画 第 1 回 ガイダンス。クロッキー・デッサン。 第 2 回 クロッキー・デッサン（芯棒制作） 第 3 回 二分の一全身像制作（クロッキーをもとに芯棒制作、粘土荒付け） 第 4～6 回 全身像制作（粘土荒付け） 第 7～8 回 全身像制作（全体の量塊のバランスをとる） 第 9～11 回 全身像制作（細部の造り込み、仕上げ） 第 12 回 全身像制作（講評） —採点① 第 13 回 テラコッタ技法（粘土かき出し・修正・乾燥） 第 14 回 テラコッタ作品焼成（800℃酸化焼成）窯だし・修正、組み立て 第 15 回 テラコッタ作品プレゼンテーション、講評。 —採点② ※授業時間外に各自制作を進めること。			
授業時間外の学習内容等 塑造室で空き時間を利用して、クロッキーを参考にしながら塑像制作をすることで塑造力や立体把握能力を養う。			
評価方法 作品の採点①②それぞれ 100 点満点で採点し、平均点と授業態度を考慮して学生の成績とする。 (クロッキー・デッサンは②の採点時に考慮する。) 作品点数 60 点以上を単位認定要件とする。			
履修上の注意 履修定員 20 名。定員を超えた場合は選抜。制作に適した服装（作業着）。 1 年次に「塑造彫刻表現 1」を履修した学生のみ受講可（3 年次編入生は考慮する）。 アーツ&ルーツ専攻（立体）希望者は、履修することが望ましい。 初日、鉛筆デッサン用具・クロッキー帳（B3 サイズ）を持参すること。 消耗品の材料費が必要です：テラコッタ粘土代、等。			
テキスト 技法についてのプリントを配布する予定。			
参考書・参考資料等 「彫塑—制作と技法の実際」「新技法シリーズ テラコッタの技法」 塑造彫刻関係の作品集			

授業科目名	彫刻造形原論 Principles of Sculpture Modeling	担当教員名	皆川 嘉博
時間割	金曜日 4 時限	オフィスアワー	
授業科目区分	専門科目－専門共通科目－導入科目		
履修区分	選択科目	授業形態	演習
配当年次・学期	1 年次後期	単位数	2 単位
前提とする授業科目、密接に関係する授業科目 「塑造彫刻表現 1」「塑造彫刻表現 2」と内容が関連している。			
授業に関連するキーワード 造形表現、空間把握、形＝フォルム			
授業の到達目標及びテーマ 自然界の形の内部構造や環境空間に潜む見えない関係構造を探り、立体作品「形＝フォルム」に内在する造形思考を模索、創造し、学生自身の造形表現に反映させる。			
授業の概要 彫刻における造形とは、事物の形を巧みに象ることでは終わるものではない。それは根元において、自然界を律する法則を考える事であり、同時に表現としての構造体に空間との関係性を求める事なのである。この講義の目的は、彫刻のそうした本質を問うことにある。人間、自然、社会など、彫刻の環境空間に潜む見えない構造を探り、芸術のさまざまなジャンルにおける「形＝フォルム」に内在する未知の造形思考を模索するとともに造形表現として展示発表をおこなう。			
授業計画 第 1 回：授業プログラム説明 個々の授業計画の作成 第 2 回：講義（彫刻の環境空間に潜む見えない 構造、人間とモノの関わり、「形＝フォルム」に内在する未知の造形思考。ピー ナスプロジェクトの微小重力環境における芸術表現の未来についてなど） 第 3～4 回：学生の研究計画とディスカッション 第 5 回：課題研究 1（学生による実践）スケッチ、プラン等 第 6～11 回：課題研究 2（学生による実践）実制作 彫刻作品制作・設置の事例についてスライドレクチャー。 第 12 回：研究発表又は展示 第 13 回：講評（学生によるプレゼンテーション）と全体のまとめ 第 14～15 回：制作記録・報告書レポートの作成手法（冊子の作成） 第 15 回			
授業時間外の学習内容等 彫刻や立体作品の図録や書籍を読むことで、立体造形の理論をより深く考察する。			
評価方法 レポート (30%) と作品 (70%) による評価			
履修上の注意 履修定員を 20 名とする。（1 年次の塑造彫刻表現 1、2 の成績を参考とする。）			
テキスト 未定			
参考書・参考資料等 未定			

授業科目名	構成基礎演習 Basic Construction	担当教員名	金 孝卿、孔 鎮烈
時間割	月曜日 2 時限	オフィスアワー	各教員による
授業科目区分	専門科目－専門共通科目－導入科目		
履修区分	選択科目	授業形態	演習（オムニバス）
配当年次・学期	2 年次前期	単位数	2 単位
前提とする授業科目、密接に関係する授業科目 構成論・色彩基礎演習			
授業に関連するキーワード 構成原理（造形要素・造形秩序）・造形発想・造形心理			
授業の到達目標及びテーマ 面白い作品とは何か、楽しい作品とは何かについて再認識する。前半には、形態を中心とした平面構成を行うが、それが単に平面に止まらず、色彩やトリック的要素や造形秩序などを生かすことにより、半立体へ、または立体への展開できる形態知覚と色彩知覚について習得する。後半には、立体造形における理解と演習により、形態の発想や表現の基礎技術について学習し、構成の理解と造形感覚を身につけることを目標とする。			
授業の概要 構成とは、色彩・形態・材料・テクスチュアなどという、あらゆる造形に共通する要素や構成原理について、造形理論および実技を通して掘り下げ、多角的に研究する領域である。構成の専門基礎演習として表現力や造形思考を養うための、色彩や形態や材料などの応用による平面構成、また三次元的な空間や道具などを生かした立体構成を行う。基礎造形として、造形素材による材質感表現、造形発想、造形心理、表現方法、表現可能性などについて錬磨する。			
授業計画 第 1 回 構成の背景：事例作品の紹介 第 2 回 点材を用いた点構成 第 3 回 点による平面構成第 4 回 線材を用いた線構成第 5 回 線による平面構成第 6 回 面材を用いた面構成第 7 回 面による平面構成 第 8 回 レリーフによる半立体構成 第 9 回 紙素材の理解と加工演習 第 10 回 平面から立体へ：事例作品の紹介 第 11 回 直線折りによる立体構成 第 12 回 曲線折りによる立体構成 第 13 回 折る＋曲げることによる立体構成 第 14 回 ユニットの単位による立体構成 第 15 回 まとめ			
授業時間外の学習内容等 授業終了までの未完了の課題は、授業時間外に制作を行い、次回授業時に完成品を提出する。			
評価方法 制作作品 70%、授業に取り組み状況 30%とで評価し、60 点以上を単位認定要件とする。			
履修上の注意 授業形式はオムニバスを基本とする。 授業内容に必要な画材（材料）を必ず用意し、受講すること。			
テキスト 必要に応じて参考資料を作成し、配布する。			
参考書・参考資料等 朝倉直巳「平面構成」「色彩構成」「立体構成」「光の構成」六耀社			

授業科目名	色彩計画 Color Planning	担当教員名	金 孝 卿
時間割	水曜日 2 時限	オフィスアワー	
授業科目区分	専門科目—専門共通科目—導入科目		
履修区分	選択科目	授業形態	講義及び演習
配当年次・学期	3 年次前期	単位数	2 単位
前提とする授業科目、密接に係る授業科目 アカデミック・リテラシー 1 / 情報リテラシー論 1			
授業に関連するキーワード 配色統計調査・イメージ言葉・カラーパレット・イメージチャート			
授業の到達目標及びテーマ 色彩計画は、実践的なデザイン行為に移すという前の手順として、様々なデザイン業界では色彩の使用目的、既存の色の調査及び評価、また対象の特徴などを把握することに必須不可欠であり、今や様々なデザイン界、景観や環境色彩分野などに盛んに行われている。色の選択するためには、単に色の好みや感覚で決めることなく、デザインの印象や色のイメージといった心理的な内容を測定する必要があるため、授業では実験を通して色彩検討能力を身につけることを目標とする。			
授業の概要 色のイメージに対応する配色やデザイン、対象とするもののイメージ、印象などを多角的、総合的に把握するための心理的な内容を測定できる心理学的尺度構成法について習得する。実際のデザイン現場において実務に役立つ「心理評価」の計測手法について触れる。まず、既存の色のイメージやデザイン（形態）の実態調査を行い、分析結果に基づいて問題提起および改善に向け、色使用のコンセプトを具現化し、研究成果についてはプレゼンテーションを通して報告する。			
授業計画 第1回 色彩計画の概念 第2回 事例作品の紹介 第3回 デザインと色彩の調査 第4回 デザインと色彩の分析 第5回 心理学的尺度構成法の理解 第6回 一対比較法の説明と調査・実験 第7回 サーストンの一対比較法の説明と調査・実験 第8回 シェッフの一対比較法の説明と調査・実験 第9回 SD法・イメージプロフィールの説明と調査・実験 第10回 因子分析の説明と実験 第11回 配色イメージ手法の確立について 第12回 イメージチャートの作成 第13回 配色パターンの作成 第14回 色彩イメージに対応する配色選定調査と実験 第15回 研究成果の発表			
授業時間外の学習内容等 毎回授業外にも調査・分析を行い、実験結果を授業前日までメールで送ること。			
評価方法 研究調査および成果50%、結果発表30%、授業への取り組む状況20%とで総合的に評価し、60点以上を単位認定要件とする。			
履修上の注意 授業内容によって専攻別・チーム別の調査や分析を行う課題があり、授業中でもアンケート調査のために学外に出向く場合がある。			
テキスト 毎回資料を配布する。			
参考書・参考資料等 南雲治嘉編「色彩戦略」「カラーイメージチャート」株式会社グラフィック社 「色彩検定公式テキスト」色彩検定協会・デジタル教材			

授業科目名	美術理論・美術史 Art Theory and History	担当教員名	天貝 義教 (1回～8回) 井上 豪 (9回～15回)
時間割	金曜日 4時限	オフィスアワー	各教員による
授業科目区分	専門科目－専門共通科目－美術理論・美術史科目		
履修区分	必修科目	授業形態	講義
配当年次・学期	1・2年次前期	単位数	2単位
密接に関係する授業科目 「東洋美術史」「西洋美術史」「日本美術史」「デザイン史」「近代絵画史」「日本建築史」と内容が関連している。			
授業に関連するキーワード 授業計画の各回の表題を参照			
授業の到達目標及びテーマ 人間に固有の美術の基礎概念を理解するとともに、日本をふくむ東洋と西洋における美術創作の歴史を学ぶことによって、美術についての基礎的な知識を身につけることを目指す。			
授業の概要 美術とは何か、美術の歴史とはなにか、という基本的な問題について、平易に解説する。古代ギリシアから20世紀のモダン・アートにいたる西洋美術の様式変遷と日本をふくむ東洋美術の様式変遷を概説する。			
授業計画 第1回 美術 (Fine Arts, Schöne Künste, Belle arti, Beaux arts) の基礎概念について (1) 第2回 美術 (Fine Arts, Schöne Künste, Belle arti, Beaux arts) の基礎概念について (2) 第3回 古代 (エーゲ海文明・ギリシア・古代ローマ) 第4回 中世 (ビザンチンとゴシック) 第5回 ルネサンス 第6回 バロック 第7回 古典主義・新古典主義・歴史主義 第8回 まとめ (19世紀末・20世紀のモダン・アート) 第9回 古代インドのストゥーパ浮彫 第10回 ガンダーラ美術 第11回 シルクロードの仏教美術 第12回 中国初期仏教美術 第13回 河西回廊の石窟美術 第14回 雲岡石窟と龍門石窟 第15回 まとめ			
授業時間外の学習内容等 授業中に配布する資料をつかい予習と復習をおこなって講義内容の理解を深める。			
評価方法 授業への取組み(40%)、レポート(60%)を基本に総合的に評価し、60点以上を単位認定要件とする。			
履修上の注意 教員免許状取得のための必修科目。			
テキスト 特に定めない。			
参考書・参考資料等 授業において適宜紹介する。			

授業科目名	東洋美術史 Oriental Art History	担当教員名	井上 豪
時間割	木曜日 5 時限	オフィスアワー	随時
授業科目区分	専門科目－専門共通科目－美術理論・美術史科目		
履修区分	選択科目	授業形態	講義
配当年次・学期	1・2 年次前期	単位数	2 単位
前提とする授業科目、密接に係る授業科目			
授業に関連するキーワード 中国 古代美術 遺跡 古代文化			
授業の到達目標及びテーマ 中国の古代美術を概観する。数千年の歴史をもつ中国美術は時代と共に姿を変え、周辺民族とともにアジア文化の基層を形作ってきた。古代作品の数々は、我々の「失われた原点」をそのまま体現した貴重な遺産といえよう。 本講座ではスライドによる作品紹介と共に、文献や考古資料を用いた文化史的背景の考察も重視する。各時代特有の美術表現と、それを生んだ古代社会の風土や社会の在り方を学び、美術表現の持つ「世界観」についての理解を目指したい。			
授業の概要 中国の古代美術を年代順に取り上げ個別に紹介する。スライドや配付資料を用いた作品解説だけでなく、考古学の知見に基づく遺跡の概要や文学史・哲学史から見た当時の文化的背景の考察なども重視、総合的な見地から美術表現とは何かを考えていきたい。			
授業計画 第 1 回 序～古代美術と現代社会 第 2 回 殷周青銅器 第 3 回 三星堆遺跡と長江文明 第 4 回 曾侯乙墓 第 5 回 始皇帝陵 第 6 回 兵馬俑坑 第 7 回 馬王堆漢墓 第 8 回 馬王堆帛画 第 9 回 満城漢墓 第 10 回 龍と雲気文 第 11 回 魏晋南北朝の書画 第 12 回 唐代壁画古墳 第 13 回 法門寺の宝物 第 14 回 宋代絵画の展開 第 15 回 まとめ			
授業時間外の学習内容等 図書館蔵書等の資料を読むことで授業を振り返り、理解を深める。			
評価方法 試験の成績に授業態度を加味し、授業への取り組み 20%、試験成績 80%として採点する。単位認定要件は 100 点満点で 60 点以上とする。			
履修上の注意 講義は一回完結の「読み切り」形式で進める。欠席しても次回の講義に支障は出ないが、欠席した回の内容は取り返しが利かないので注意されたい。			
テキスト 内容に応じ毎回資料を作成、配付する。書籍等のテキストは使用しない。			
参考書・参考資料等 必要に応じ講義の中で紹介する。			

授業科目名	日本美術史 History of Japanese Art	担当教員名	志邨 匠子、吉川 耕太郎 大関 智子
時間割	木曜日 2 時限、一部集中	オフィス	各教員による
授業科目区分	専門科目－専門共通科目－美術理論・美術史科目		
履修区分	必修科目	授業形態	講義
配当年次・学期	1・2 年次前期	単位数	2 単位
前提とする授業科目、密接に関係する授業科目 明治以降の日本美術（絵画）については、「近代絵画史」で講じる。			
授業に関連するキーワード 日本美術			
授業の到達目標及びテーマ この授業では、先史時代から江戸時代に至る日本美術の歴史を概観する。日本美術に関する基礎知識を習得するだけでなく、鑑賞を通じて、表現上の特色などを、自ら発見し理解に至ることを目標とする。			
授業の概要 縄文時代から江戸時代に至る日本美術（絵画、彫刻、工芸）について、主要作品を例示しながら授業をすすめる。また日本美術をより深く理解するために、美術作品に関する専門用語、作品の主題や背景についての解説をおこない、各時代の美術と社会との関係や異文化との交流など、アジアや西洋との関係も視野に入れる。			
授業計画 第 1 回 縄文時代－土器、土偶 第 2 回 弥生・古墳時代－土器、埴輪 第 3 回 飛鳥・白鳳時代－仏教の伝来 第 4 回 奈良時代Ⅰ－唐文化の影響と天平美術 第 5 回 奈良時代Ⅱ－唐文化の影響と天平美術 第 6 回 平安時代－密教伝来と貞観彫刻、藤原美術 第 7 回 鎌倉時代－鎌倉リアリズム、和様の形成と絵巻、鎌倉肖像画 第 8 回 客員教員による特別講義 第 9 回 外部講師による特別授業第 10 回 室町時代Ⅰ－水墨画の移入 第 11 回 室町時代Ⅱ－水墨画の展開と狩野派 第 12 回 桃山時代－障壁画と装飾性 第 13 回 江戸時代Ⅰ－狩野派の展開と琳派 第 14 回 江戸時代Ⅱ－文人画と写実主義、町人文化と浮世絵第 15 回 まとめ			
授業時間外の学習内容等 授業時間外に、授業で扱った作品を確認しておくこと。			
評価方法 最終回（まとめ）で、教場試験あるいは教場レポートにより評価する。			
履修上の注意			
テキスト 使用しない。（適宜、授業内にプリントを配布する）			
参考書・参考資料等 授業内に、適宜紹介する。			

授業科目名	工芸概論 Introduction to Craftsmanship	担当教員名	木田 拓也
時間割	集中	オフィスアワー	—
授業科目区分	専門科目－専門共通科目－美術理論・美術史科目		
履修区分	選択科目	授業形態	講義
配当年次・学期	1・2年次	単位数	2単位
前提とする授業科目、密接に関係する授業科目 特になし			
授業に関連するキーワード 工芸、文化財、国宝、無形文化財、地場産業、手仕事、民芸			
授業の到達目標及びテーマ 工芸の歴史のなかで重要な作品や作家や用語など、工芸史に関する基礎的な知識を学ぶとともに、工芸に関する概念や制度をめぐる基礎的な知識、例えば、国宝や無形文化財、民芸や地場産業などについて学ぶ。 工芸の歴史的な流れと基礎知識を学ぶことを目標とする。			
授業の概要 集中講義形式で行うこの本講では、1日目と2日目では古代から現代まで通史的に、日本の各時代を代表する工芸作品について学ぶ。3日目と4日目は工芸に関わる文化財制度、工芸技術の保護制度、地域との関わり、工芸概念など、基礎的な事項について学ぶ。			
授業計画 第1回 日本工芸の歴史 先史時代 第2回 日本工芸の歴史 古代 第3回 日本工芸の歴史 中世 第4回 日本工芸の歴史 近世 第5回 日本工芸の歴史 明治 第6回 日本工芸の歴史 大正 第7回 日本工芸の歴史 昭和 第8回 日本工芸の歴史 平成 第9回 御物について 第10回 名物について 第11回 国宝について (1) 第12回 国宝について (2) 第13回 重要無形文化財・地場産業について 第14回 民芸について 第15回 工芸概念の変容 工芸の現在とこれから			
授業時間外の学習内容等 図書館等に所蔵されている美術全集などを閲覧して日本美術史のおおよその流れをあらかじめ把握しておくこと。			
評価方法 出席・授業態度・コメントシート 50%、レポート 50%			
履修上の注意 授業時間内にコメントシートを実施する場合がある。			
テキスト 特になし			
参考書・参考資料等 特になし			

授業科目名	デザイン史 History of Design	担当教員名	天貝 義教
時間割	水曜日 1 時限	オフィス	
授業科目区分	専門科目—専門共通科目—美術理論・美術史科目		
履修区分	選択科目	授業形態	講義
配当年次・学期	1・2 年次後期	単位数	2 単位
密接に関係する授業科目 「美術理論・美術史」「デザイン史特講」「近代装飾デザイン史」「近代デザイン史特講義」と内容が関連している。			
授業に関連するキーワード 各回の表題を参照			
授業の到達目標及びテーマ 産業革命以降のデザインの基礎的な概念を理解するとともに、その歴史を学ぶことによって、デザインについての基礎知識を身につけることを目指す。			
授業の概要 この授業では近代デザインの画期的な歴史的事項を概説するとともに、それらの背景にある主要なデザイン理論からデザインの基礎的な概念をとりあげて平易に解説する。			
授業計画 第1回 デザイン史を学ぶ意義について 第2回 産業革命における技術革新と造形意識の変化 第3回 芸術と産業 (1)：万国博覧会と近代デザイン 第4回 芸術と産業 (2)：モリスとアーツ・アンド・クラフツ運動 第5回 芸術と産業 (3)：ウィーンにおける応用美術の振興 第6回 歴史主義からの脱却：アール・ヌーヴォーとセセッション運動 第7回 様式主義から規格化へ：ドイツ工作連盟の設立とその理念 第8回 1920 年代の動向 (1)：バウハウスの設立 第9回 1920 年代の動向 (2)：バウハウスの発展 第10回 1920 年代の動向 (3)：近代デザインとモダン・アートの交流 第11回 アメリカにおける近代デザイン：ビジネスとしてのデザインの発展 第12回 第二次世界大戦前の日本：応用美術と意匠図案の国家的振興 第13回 第二次世界大戦後の日本：戦後の復興と近代デザイン理念の普及 第14回 ポスト・モダニズム以降：デザイン概念の拡張とデザインのモラル 第15回 まとめ			
授業時間外の学習内容等 教科書ならびに参考書を熟読し、予習と復習をおこない、講義内容の理解を深める。			
評価方法 授業への取組み(40%)、レポート(60%)を基本に総合的に評価し、60 点以上を単位認定要件とする。			
履修上の注意 教員免許状取得のための選択科目。			
テキスト 阿部公正『増補新装 カラー版 世界デザイン史』美術出版社			
参考書・参考資料等 出原栄一『日本のデザイン運動—インダストリアルデザインの系譜』			

授業科目名	西洋美術史 History of Western Art	担当教員名	天貝 義教
時間割	水曜日 2 時限	オフィスアワー	
授業科目区分	専門科目－専門共通科目－美術理論・美術史科目		
履修区分	選択科目	授業形態	講義
配当年次・学期	1・2 年次後期	単位数	2 単位
密接に関係する授業科目 「西洋美術史」と内容が関連している。			
授業に関連するキーワード 各回の表題を参照			
授業の到達目標及びテーマ 古代ギリシアから二十世紀にいたるまでの西洋美術を特徴づけるもののひとつとしてパースペクティブ (Perspective) がある。パースペクティブの考え方はルネサンス期に確立し、二十世紀にいたって批判の対象となった。本講義では、ルネサンス、バロック、十九世紀、二十世紀におけるパースペクティブに関わる主要な議論と作品を取り上げ、西洋美術におけるパースペクティブの歴史的意義とともにその今日的な意義を探る。			
授業の概要 本講義では、15 世紀の L.B.アルベルティ、バロック期のアンドレア・ポッツォ、19 世紀初頭の J.M.W.ターナー、20 世紀前半のエル・リシツキーらによる Perspective に関する主要な議論を順次取り上げて、壁画・天井画・タブロー画・空間形成における Perspective の意義の変化を概説してゆく。			
授業計画 第 1 回 はじめに Perspective とは何か。「視的ピラミッド」と「その切断」とは何か。 第 2 回 ルネサンス期における Perspective の成立 (1) L.B.アルベルティの『絵画論』以前 第 3 回 ルネサンス期における Perspective の成立 (2) L.B.アルベルティの『絵画論』 第 4 回 ルネサンス期における Perspective のイタリアにおける広がり 第 5 回 ルネサンス期における Perspective の探求 (1) 数学者ピエロ 第 6 回 ルネサンス期における Perspective の探求 (2) イタリアから北方へ 第 7 回 バロック期における Perspective の発展 (1) アンドレア・ポッツォの試み 第 8 回 バロック期における Perspective の発展 (2) ローマからウィーンへ 第 9 回 バロック期における Perspective の発展 (3) 天井画の伝統 第 10 回 19 世紀初頭における Perspective の展開 Perspective の理論家としてのターナー 第 11 回 20 世紀前半における Perspective からの脱却 (1) リシツキーの空間デザイン第 第 12 回 20 世紀前半における Perspective からの脱却 (2) 未来派 第 13 回 20 世紀前半における Perspective からの脱却 (3) キュビズム 第 14 回 20 世紀前半における Perspective からの脱却 (4) アブストラクト・アート 第 15 回 まとめ			
授業時間外の学習内容等 各回の講義内容について、予習と復習を行なうことが求められる。			
評価方法 授業への取組み (40%) とレポート (60%) を基本に総合的に評価し、60 点以上を単位認定要件とする。			
履修上の注意 この授業では「視的ピラミッド」など、L. B.アルベルティの絵画論、アンドレア・ポッツォの教則本、J. M. W. ターナーの講義、エル・リシツキーの空間デザイン論などにみられる Perspective に関わる専門的な用語を使うので、これらの芸術家・デザイナーについて学習しておくことが必要である。			
テキスト 特に定めない。			
参考書・参考資料等 アルベルティ著・三輪福松訳『絵画論』中央公論美術出版。アレクサンダー・ドルナー著・嶋田厚監訳『<美術>を超えて』勁草書房。			

授業科目名	近代絵画史 History of Modern Drawing and Painting	担当教員名	志邨 匠子
時間割	木曜日 3 時限	オフィスアワー	
授業科目区分	専門科目－専門共通科目－美術理論・美術史科目		
履修区分	選択科目	授業形態	講義
配当年次・学期	1・2 年次後期	単位数	2 単位
前提とする授業科目、密接に関係する授業科目 明治以前の日本美術については、「日本美術史」で講じる。			
授業に関連するキーワード 日本美術、ジャポニスム			
授業の到達目標及びテーマ 明治期、西洋からもたらされた油絵技法により、日本人による「洋画」が描かれるようになり、伝統的な日本画も油絵の影響を受けながら展開する。一方、同時期の西欧では、浮世絵をはじめとする日本美術への関心が高まっていた。西洋における美術動向や日本美術からの影響にも触れながら、広い視野から日本近代絵画の諸相を考察することを目標とする。			
授業の概要 全体を通じて、明治初期から戦前までの日本絵画（洋画、日本画）について講じるが、西洋との関係性を考えるために、同時代のヨーロッパ、アメリカにおけるジャポニスムや、当時の美術動向にも触れる。また可能な限り同時代資料を紹介し、読み解いていく。			
授業計画 第 1 回 「美術」という概念－日本画と洋画 第 2 回 日本洋画の創始－高橋由一 第 3 回 技術から美術へ－工部美術学校と初期渡欧画家たち 第 4 回 日本洋画の新派－黒田清輝と白馬会 第 5 回 日本画の革新－狩野芳崖とフェノロサ 第 6 回 日本画の洋風化－横山大観・菱田春草と岡倉天心 第 7 回 ジャポニスムⅠ－フランス印象派と浮世絵 第 8 回 ジャポニスムⅡ－後期印象派と日本美術 第 9 回 ジャポニスムⅢ－ホイッスラーと日本美術 第 10 回 日本美術のアイデンティティ－1893 年シカゴ万博における日本美術 第 11 回 水墨表現とモダンアート－橋本雅邦とアメリカ美術批評 第 12 回 ヌードと美術Ⅰ－西洋美術におけるヌードの展開第 13 回 ヌードと美術Ⅱ－裸体画論争と日本的ヌードの展開第 14 回 個性の重視－白樺派と村山槐多 第 15 回 日本的洋画の模索－萬鉄五郎と岸田劉生 定期試験			
授業時間外の学習内容等 授業時間外に、授業で扱った作品を確認しておくこと。			
評価方法 定期試験により評価する。			
履修上の注意			
テキスト 使用しない。（適宜、授業内にプリントを配布する）			
参考書・参考資料等 授業内に、適宜紹介する。			

授業科目名	デザイン史特講 History of Design (Special Lecture)	担当教員名	天貝 義教
時間割	金曜日 3 時限	オフィスアワー	
授業科目区分	専門科目ー専門共通科目ー美術理論・美術史科目		
履修区分	選択科目	授業形態	講義
配当年次・学期	2・3 年次前期	単位数	2 単位
密接に関係する授業科目 「デザイン史」「近代装飾デザイン史」「近代デザイン史特講義」と内容が関連している。と内容が関連している。			
授業に関連するキーワード 各回の表題を参照			
授業の到達目標及びテーマ この授業では、日本とヨーロッパとのデザイン交流についての基礎的な知識を身につけるとともに、今日におけるデザイン活動についての国際的視野を広げることを目的とする。			
授業の概要 明治維新から第二次世界大戦後までの日本とヨーロッパのデザイン交流の今日的意義について、主要な万国博覧会への参同とヨーロッパへの留学生の派遣を手がかりにしながら講述する。			
授業計画 第 1 回 はじめに 文明開化と殖産興業のもとでの応用美術の振興第 2 回 ウィーン万国博覧会プログラムと日本語「美術」 第 3 回 ウィーン応用美術博物館について 第 4 回 ウィーン応用美術大学について第 5 回 平山英三のウィーン留学 第 6 回 平山英三と松岡寿の工業意匠概念 汎美的意匠概念 第 7 回 日本におけるアール・ヌーヴォーとセセッションの流行 第 8 回 安田禄造のウィーン留学 経済的工芸概念 第 9 回 東京高等工芸学校教員のヨーロッパ留学 第 1 0 回 アーツ・アンド・クラフツ運動 『民衆の芸術』 第 1 1 回 アーツ・アンド・クラフツ運動 『ユートピアだより』第 1 2 回 ドイツ工作連盟と工房運動 第 1 3 回 民芸と産業工芸 第 1 4 回 第二次大戦後の日本におけるモダン・デザインの理念 第 1 5 回 まとめ			
授業時間外の学習内容等 各回の授業計画を参考にして予習と復習をおこない、講義内容の理解を深めることが必要である。			
評価方法 授業への取組み(40%)、レポート(60%)を基本に総合的に評価し、60 点以上を単位認定要件とする。			
履修上の注意 教科書ならびに参考書を熟読し、専門用語（日本語ならびに外国語）について理解を深めておくことが必要である。			
テキスト デザイン史フォーラム編『国際デザイン史』思文閣出版			
参考書・参考資料等 ウィリアム・モリス著『民衆の芸術』岩波文庫ならびに同著『ユートピアだより』岩波文庫版。その他授業において適宜紹介する。			

授業科目名	日本建築史 1 History of Japanese Architecture 1	担当教員名	澤田 享
時間割	月曜日 2 時限	オフィスアワー	火曜日 2 時限
授業科目区分	専門科目－専門共通科目－美術理論・美術史		
履修区分	選択科目	授業形態	講義
配当年次・学期	2・3 年次前期	単位数	2 単位
前提とする授業科目、密接に関係する授業科目 特になし			
授業に関連するキーワード 古建築の構造、様式（古代～中世）			
授業の到達目標及びテーマ 古代から中世までを通し、主としてわが国の建築を歴史的に理解する。 建築の歴史を基礎知識として身に付けるとともに、それ等を正しく人に伝えることが出来るようになること。 ・テーマ 日本伝統建築 文化財としての建築			
授業の概要 古代から中世までを通して、わが国の建築の歴史的な理解を深める。すなわち古代 1：先史/仏教建築の導入とその技術・技法。古代 2：寺院建築の技法/平城京・地方官衙（秋田市を含む）。古代 3：寺院・神社の多様化（特に様式についても触れる）。中世 1：中世における建築様式の流れ。中世 2：中国からの新様式の輸入（天竺様・唐様）の導入および和様の展開。中世 3：折衷様の発生。中世 4：中世社寺建築の技法と意匠。等について歴史的かつ様式の変化について学ぶ。			
授業計画 第 1 回 古代 1：先史建築の発生と発達の要因（縄文、弥生時代の建築） 第 2 回 古代 2：神社建築の成立/神社の起源、神殿の形式 第 3 回 古代 3：飛鳥・奈良時代の寺院建築/法隆寺、奈良時代の寺院建築の様式 第 4 回 古代 4：都城の制/都城の建設、都城の制、中国の都城と日本の都 第 5 回 古代 5：平安時代の寺院建築/密教の伝来と密教建築、浄土教の寺院建築 第 6 回 古代 6：神社建築の発展/奈良時代の神社建築から平安時代の神社建築 第 7 回 古代 7：古代の住宅建築/宮殿、古代の住宅様式/庶民の住宅 第 8 回 中世 1：中世における建築様式の流れ/建築界の動向と建築様式、構造 第 9 回 中世 2：中国からの新様式の導入 1/天竺様(大仏様)建築 第 10 回 中世 3：中国からの新様式の導入 2/禅宗の伝来と唐様(禅宗様)建築、伽藍の制について 第 11 回 中世 4：和様と新様式の混合(折衷様)の出現と展開 第 12 回 中世 5：中世社寺建築の技法と意匠 第 13 回 中世 6：中世の住宅建築/中世の住宅様式/庭園建築/庶民の住宅 第 14 回 中世 7：社寺建築の細部意匠の特徴 第 15 回 まとめ (定期試験)			
授業時間外の学習内容等 授業で習ったこと、配付された資料をもとに復習を行っておくこと。			
評価方法 小レポート 20%、本レポート 80%で評価し、100 点満点で 60 点以上を単位認定とする。			
履修上の注意 テキストは毎回必ず持参すること。			
テキスト コンパクト版 建築史[日本・西洋] 彰国社 3,240 円、日本建築史図集 彰国社 2,700 円、自作プリント (適宜)			
参考書・参考資料等			

授業科目名	日本彫刻史 Japan sculpture History	担当教員名	井上 豪
時間割	水曜日 3 時限	オフィスアワー	随時
授業科目区分	専門科目－専門共通科目－美術理論・美術史科目		
履修区分	選択科目	授業形態	講義
配当年次・学期	2 年次前期	単位数	2 単位
前提とする授業科目、密接に関係する授業科目 「美術理論・美術史」「日本美術史」「東北造形史」と一部内容が関連する			
授業に関連するキーワード 仏像 日本史			
授業の到達目標及びテーマ 仏教彫刻を中心に日本彫刻史の流れを概観する。飛鳥時代の仏教受容に始まる日本の仏教美術は、大陸の先進文化を吸収しながら常に時代の先端として古代美術の世界を牽引してきた。本講座では日本を代表する名品について理解を深め、同時に宗教彫刻が表現する「時代の精神」について学びたい。様々な角度から総合的な彫刻史の理解を目指すのが目標である。			
授業の概要 主に仏教美術の受容期と定着期に目を向け、仏像の名品を解説する。古代美術はどのように受容され日本の中でどのような流れを生んできたのか。スライドで作例の特徴を観察し、同時に文献資料などから制作事情や伝来など作例の背景を考えながら、時代の空気と不可分な仏像の表現を立体的に学んでいきたい。			
授業計画 第1回：序・仏教美術と宮廷美術 第2回：仏像の見方 第3回：仏教伝来と飛鳥寺の造営 第4回：法隆寺釈迦三尊像とその周辺～飛鳥止利様式 第5回：法隆寺四十八体仏と白鳳様式論 第6回：山田寺仏頭～国家官寺の時代 第7回：薬師寺聖観音像と薬師三尊像～白鳳から天平へ 第8回：東大寺大仏とその周辺 第9回：法華堂と戒壇院 第10回：興福寺・阿修羅像と八部衆十大弟子 第11回：唐招提寺と一木造 第12回：東寺講堂と密教彫刻 第13回：寄木造と定朝様式 第14回：運慶・快慶と鎌倉美術 第15回：まとめ			
授業時間外の学習内容等 図書館蔵書等の資料を読むことで授業を振り返り、理解を深める。			
評価方法 試験の成績に授業態度を加味し、授業への取り組み 20%、試験成績 80%として採点する。単位認定要件は 100 点満点で 60 点以上とする。			
履修上の注意 講義は一回完結の「読み切り」形式で進める。欠席しても次回の講義に支障は出ないが、欠席した回の内容は取り返しが利かないので注意されたい。			
テキスト 内容に応じ毎回資料を作成、配付する。書籍等のテキストは使用しない。			
参考書・参考資料等 必要に応じ講義の中で紹介する。			

授業科目名	日本建築史 2 History of Japanese Architecture 2	担当教員名	澤田 享
時間割	月曜日 2 時限	オフィスアワー	
授業科目区分	専門科目－専門共通科目－美術理論・美術史		
履修区分	選択科目	授業形態	講義
配当年次・学期	2・3 年次後期	単位数	2 単位
前提とする授業科目、密接に関係する授業科目 「日本建築史 1」の内容がやや関連している。			
授業に関連するキーワード 構造、様式（近世）			
授業の到達目標及びテーマ 全国的にも遺構数が多い。近世の建築を取り上げ、その様式、技術的な変遷を理解すると同時に、そこからその建物の建立年代を判定する能力を養う。 ・テーマ 日本古建築の様式、技術の変遷 日本古建築の建立時期の判定法			
授業の概要 比較的現遺構数が多い近世の建物を対象にして、近世建築について理解を深める。すなわち近世 1：近世における建築界の動向とその建築。近世 2：寺院・神社・霊廟建築。近世 3：城郭建築（城郭建築については近世以前のものも触れる）。近世 4：住宅建築を取り上げ、詳述する。近世建築については秋田県でも数多くの遺構があることから、それらについても併せて概説する。そして建築(美術・芸術を含む)の歴史を基礎知識として身につけると共に、一つの建築を前にしてその魅力を自分なりに感じとり、それ等を正しく伝えることが出来るよう講義を行う。			
授業計画 第 1 回 城郭建築の歴史と形態 第 2 回 城郭建築の技術的発展 第 3 回 近世の住宅(近世住宅の展開) 第 4 回 近世の住宅(桃山・江戸時代) 第 5 回 数寄屋建築(茶道の成立、書院の茶と草庵茶室) 第 6 回 数寄屋建築と数寄屋造の建築 第 7 回 霊廟 第 8 回 聖堂と学校建築 第 9 回 能舞台と劇場建築 第 10 回 農家建築 第 11 回 建築技術の発達と発展 第 12 回 近世の細部意匠と建立年代の判定法(臺股、木鼻の絵様線形を中心に)して 第 13 回 近世の細部意匠と建立年代の判定法(虹梁の絵様線形を中心に)して 第 14 回 建築構造(継手、仕口)について 第 15 回 まとめ (定期試験)			
授業時間外の学習内容等 授業で習ったこと、配付された資料をもとに復習を行っておくこと。			
評価方法 小レポート 20%、本レポート 80%で評価し、100 点満点で 60 点以上を単位認定とする。			
履修上の注意 必ずテキストを持参すること。			
テキスト 自作プリント（適宜）			
参考書・参考資料等			

授業科目名	近代装飾デザイン史 History of Modern Ornamental Design	担当教員名	天貝 義教
時間割	月曜日 1 時限	オフィスアワー	
授業科目区分	専門科目—専門共通科目—美術理論・美術史科目		
履修区分	選択科目	授業形態	講義
配当年次・学期	3・4 年次前期	単位数	2 単位
前提とする授業科目、密接に関係する授業科目 「デザイン史」「近代装飾デザイン史」「近代デザイン史特講義」と内容が関連している。			
授業に関連するキーワード 各回の表題を参照			
授業の到達目標及びテーマ この授業では、デザインにおいて形態とともに重要な意味を持つ装飾についての歴史的な意義を学び、今日における装飾の創作の意味について理解を深めることを目的とする。			
授業の概要 19 世紀後半から 20 世紀前半までのヨーロッパにおける主要な芸術論にみられる装飾の意義を応用美術の観点から講述し、ラスキン独自の経済概念についても考察する。			
授業計画 第 1 回 はじめに 19 世紀後半のヨーロッパ装飾論 第 2 回 歴史主義的装飾論 第 3 回 アール・ヌーヴォーの有機的装飾論 第 4 回 オットー・ヴァグナーの近代建築論における装飾の意義 第 5 回 ヘルマン・ムテジウスの工芸論における装飾の意義 第 6 回 20 世紀前半の装飾論（1） アドルフ・ロースの装飾否定論 第 7 回 20 世紀前半の装飾論（2） ル・コルビュジェの装飾芸術論 第 8 回 ラスキンの芸術論における装飾の意義 『近代画家論』『風景の真理と倫理』 第 9 回 『建築の七灯』『ビルディングとアーキテクチャ』 第 10 回 『ヴェニス石の石』『ゴシックの本質』 第 11 回 『芸術経済論』『実用と装飾の二大目的』 第 12 回 『この最後の者にも』『最大多数の高潔にして幸福な人間』 第 13 回 『ごまとゆり』『王侯の宝庫』『王妃の庭園』 第 14 回 『フォルス・クラヴィゲラ』『きれいな空気と水と大地』 第 15 回 まとめ			
授業時間外の学習内容等 各回の授業計画を参考にして予習と復習をおこない、講義内容の理解を深めることが必要である。			
評価方法 授業への取組み(40%)、レポート(60%)を基本に総合的に評価し、60 点以上を単位認定要件とする。			
履修上の注意 教科書ならびに参考書を熟読し、専門用語（日本語ならびに外国語）について理解を深めておくことが必要である。			
テキスト デザイン史フォーラム編『近代工芸運動とデザイン史』 思文閣出版			
参考書・参考資料等 ラスキンの著『建築の七灯』 岩波文庫版、モリス著『ゴシックの本質』 みすず書房。その他の参考文献は授業において適宜紹介する。			

授業科目名	シルクロード図像学 1 Silk Road Iconography 1	担当教員名	井上 豪
時間割	金曜日 1 時限	オフィスアワー	
授業科目区分	専門科目－専門共通科目－美術理論・美術史科目		
履修区分	選択科目	授業形態	講義
配当年次・学期	3・4年次前期	単位数	2単位
前提とする授業科目、密接に関係する授業科目 「美術理論・美術史」と一部内容が関連している。			
授業に関連するキーワード シルクロード 仏教美術			
授業の到達目標及びテーマ 東西文明の行き交う絹の道は、インドから東アジアへ向かう仏教美術の道としても重要である。古代シルクロードの美術は、インドをはじめペルシアや西洋など様々な要素が混じり合い、それらが渾然一体となって独特の世界観を形作ってきた。本講座では仏教美術を中心にガンダーラから中央アジアにかけて作例を取り上げ、ペルシアやギリシアなど各地の遺品にその源流を辿りながら図像変遷の過程を追っていく。広大なユーラシア大陸を舞台に展開した、壮大な文化交流の姿について解説する。			
授業の概要 仏教美術に見られる様々なモチーフを毎回取り上げて解説し、図像バリエーションとその意味について考察する。スライドを用いた図像観察と配付資料による文化的考察を並行し、多角的視点から古代美術を捉えていきたい。			
授業計画 第1回 ガイダンス 第2回 ストウーパから五重塔へ 第3回 如来の服制と僧侶の袈裟 第4回 菩薩の宝冠 第5回 神将の甲冑 第6回 執金剛神の図像 第7回 邪鬼と崑崙奴 第8回 飛天の姿 第9回 極楽のイメージ 第10回 須弥山と崑崙山 第11回 風神の色々 第12回 仏教における龍のイメージ 第13回 如意宝珠の形象 第14回 仏足跡と瑞像図 第15回 まとめ			
授業時間外の学習内容等 図書館蔵書等の資料を読むことで授業を振り返り、理解を深める。			
評価方法 試験の成績に授業態度を加味し、授業への取り組み 20%、試験成績 80%として採点する。単位認定要件は 100 点満点で 60 点以上とする。			
履修上の注意 講義は一回完結の「読み切り」形式で進める。欠席しても次回の講義に支障は出ないが、欠席した回の内容は取り返しが利かないので注意されたい。			
テキスト 内容に応じ毎回資料を作成、配付する。書籍等のテキストは使用しない。			
参考書・参考資料等 必要に応じ講義の中で紹介する。			

授業科目名	近代建築史 History of Modern Architecture	担当教員名	澤田 享
時間割	金曜日 3 時限	オフィスアワー	
授業科目区分	専門科目－専門共通科目－美術理論・美術史		
履修区分	選択科目	授業形態	講義
配当年次・学期	3・4 年次前期	単位数	2 単位
前提とする授業科目、密接に関係する授業科目 特になし			
授業に関連するキーワード 構造、様式、その時代的変遷			
授業の到達目標及びテーマ 19 世紀後半の日本においては、洋風化が近代と同じ意味をもっていたので、建築にあっても洋風建築技術の輸入と普及が第 1 の目的となり、建築界もそれに沿って、近代建築へ移っていった。その様相について論じ、また日本近代建築の基礎になった欧米近代建築等についても併せて解説する。 ・テーマ 洋風建築と技術 日本の風土的条件に適した建築 欧米の近代建築の様式			
授業の概要 日本の近代建築は西欧化の時代、新技術と思想の導入、近代化の時代の 3 要素から成立する。したがって(1)産業革命と洋風化、(2)洋風建築の伝来と外国人技師の活動、(3)コンドルの来日と日本人建築家の育成、新構法の導入と日本人建築家の育成、(4)新構法の導入と耐震構造の工夫、(5)西欧近代建築思潮の影響、(6)分離派建築会、(7)関東大震災後の公共施設、(8)～(15)については日本近代建築の基礎となった欧米での主要な建築運動・様式などについて解説する。			
授業計画 第 1 回 建築構造の成り立ち（伝統工法と西洋工法の概説） 第 2 回 産業革命と洋風建築 第 3 回 お雇い外国人の建築 第 4 回 日本人建築家の誕生と建築 第 5 回 耐震建築構造とその発展 第 6 回 近代建築思潮と国際建築様式の展開 第 7 回 国民的様式の追求と様式の相対化 第 8 回 アーツ・アンド・クラフツ運動 第 9 回 世紀末の装飾芸術 アールヌーヴォー 第 10 回 芸術の革新 ウィーン・ゼツェッシオン/ドイツ表現主義 第 11 回 前衛としての建築 ロシア構成主義/デ・ステール 第 12 回 有機的建築 フランク・ロイド・ライト 第 13 回 建築の詩学 ル・コルビュジエ 第 14 回 Less is More ミース・ファン・デル・ローエ 第 15 回 まとめ （定期試験）			
授業時間外の学習内容等 授業で習ったこと、配付された資料にて復習を行っておくこと。			
評価方法 定期試験 80%、レポート 20%で評価し、100 点満点で 60 点以上を単位認定とする。			
履修上の注意 テキストは必ず持参すること。また、適宜自作プリントを配布する			
テキスト コンパクト版 建築史[日本・西洋] 彰国社 3,240 円(日本建築史 I 等で購入済みの場合は購入不要)、近代建築史図集 彰国社 2,484 円、自作プリント（適宜配布）			
参考書・参考資料等			

授業科目名	近代デザイン史特講 History of Modern Design (Special Lecture)	担当教員名	天貝 義教
時間割	火曜日 2 時限	オフィスアワー	
授業科目区分	専門科目－専門共通科目－美術理論・美術史科目		
履修区分	選択科目	授業形態	講義
配当年次・学期	3・4 年次後期	単位数	2 単位
密接に関係する授業科目 「デザイン史」「近代装飾デザイン史」「デザイン史特講義」と内容が関連している。			
授業に関連するキーワード 各回の表題を参照			
授業の到達目標及びテーマ この授業では、20 世紀のモダン・アートとモダン・デザイン運動のモデルのひとつであるバウハウスのデザイン理念とその後の展開について学び、デザインの社会的価値についての理解を深めることを目的とする。			
授業の概要 バウハウスの理念について、第一次大戦後のドイツにおけるバウハウスの創立と閉鎖から、第二次大戦後のドイツとアメリカ合衆国における展開にいたるまで、具体的事例にもとづいて概説する。			
授業計画 第1回 使用するテキストについての説明 第2回 ヴァイマルにおけるバウハウス（1） 第3回 ヴァイマルにおけるバウハウス（2） 第4回 デッサウにおけるバウハウス（1） 第5回 デッサウにおけるバウハウス（2） 第6回 ハンネス・マイアーのバウハウス改革（1） 第7回 ハンネス・マイアーのバウハウス改革（2） 第8回 バウハウスの閉鎖とバウハウス人たちのアメリカ移住 第9回 モホイ・ナジのニュー・バウハウス 第10回 ドイツにおけるバウハウスの継承（1）ウルム造形大学 第11回 ドイツにおけるバウハウスの継承（2）具体芸術と外的環境形成の理論 第12回 ドイツにおけるバウハウスの継承（3）インダストリアル・デザインの概念 第13回 アルバースとブラック・マウンテンカレッジ（1） 第14回 アルバースとブラック・マウンテンカレッジ（2） 第15回 まとめ			
授業時間外の学習内容等 配布テキストならびに紹介した参考図書にもとづいて予習と復習をおこなうことが必要である。			
評価方法 授業への取組み(40%)、レポート(60%)を基本に総合的に評価し、60 点以上を単位認定要件とする。			
履修上の注意 配布したテキストをもとに、専門用語（日本語ならびに外国語）について理解を深めておくことが必要である。			
テキスト 第1回の講義時に配布する。			
参考書・参考資料等 テキスト以外の参考資料・図書は授業において適宜紹介する。			

授業科目名	シルクロード図像学 2 Silk Road Iconography 2	担当教員名	井上 豪
時間割	木曜日 3 時限	オフィスアワー	
授業科目区分	専門科目－専門共通科目－美術理論・美術史科目		
履修区分	選択科目	授業形態	講義
配当年次・学期	3・4 年次後期	単位数	2 単位
前提とする授業科目、密接に係る授業科目 「美術理論・美術史」「シルクロード図像学 1」と一部内容が関連している。			
授業に関連するキーワード シルクロード 仏教美術			
授業の到達目標及びテーマ <p>インドに発した仏教美術はシルクロードを東へ向かい、沙漠を越えて中国に伝えられた。隊商路として栄えた西域のオアシス地帯は、多彩な文化が常に混じり合う「民族の十字路」であった。</p> <p>本講義は、前期に開講する「シルクロード図像学 1」のいわば後編として、楼蘭・亀茲などタリム盆地の仏教美術を中心に取り上げる。特に代表作例として石窟壁画に焦点を当て、個々の画題を考察しながら、背後にある仏教思想やオアシスの古代文化など、多角的な視点で古代美術の世界について解説する。</p>			
授業の概要 <p>遺跡全体から見た古代美術のあり方、壁画の各テーマから読み取れる美術の変容や文化的背景の検証、細部描写から再現される古代風俗の姿など、複数の視点から西域美術の図像を考察する。講義には配付資料とスライドを用い、幅広い視野で古代美術を捉えていきたい。</p>			
授業計画 第 1 回 ガイダンス 第 2 回 楼蘭王国とミーラン遺跡 第 3 回 古代ホータンの信仰と図像 第 4 回 クチャ・キジル石窟の形式と壁画 第 5 回 壁画の主題解釈「国王の帰依」 第 6 回 壁画の主題解釈「女人の供養」 第 7 回 壁画の主題解釈「出家の修行と在家の布施」 第 8 回 図像の継承～型と粉本 第 9 回 山岳図と本生図 第 10 回 天象図とオアシスの自然観 第 11 回 寄進者像からみたシルクロードの服飾 第 12 回 涅槃図とその周辺 第 13 回 舍利容器と骨臓器 第 14 回 贗作の図像学 第 15 回 まとめ			
授業時間外の学習内容等 <p>図書館蔵書等の資料を読むことで授業を振り返り、理解を深める。</p>			
評価方法 <p>試験の成績に授業態度を加味し、授業への取り組み 20%、試験成績 80%として採点する。単位認定要件は 100 点満点で 60 点以上とする。</p>			
履修上の注意 <p>講義は一回完結の「読み切り」形式で進める。欠席しても次回の講義に支障は出ないが、欠席した回の内容は取り返しが利かないので注意されたい。</p>			
テキスト <p>内容に応じ毎回資料を作成、配付する。書籍等のテキストは使用しない。</p>			
参考書・参考資料等 <p>必要に応じ講義の中で紹介する。</p>			

授業科目名	油画演習 Oil Painting	担当教員名	大谷 有花
時間割	木曜日 3、4 時限	オフィスアワー	水曜日 2 時限 (要予約)
授業科目区分	専門科目－専門共通科目－専門基礎科目		
履修区分	選択科目	授業形態	演習
配当年次・学期	2 年次前期	単位数	2 単位
前提とする授業科目、密接に関係する授業科目 特になし			
授業に関連するキーワード 油画表現、人物画、静物画、自由制作			
授業の到達目標及びテーマ 人物・静物の多様なモチーフと自由制作を通して、油彩表現を学ぶ。各自の技術力に応じてモチーフの解釈を広げ、具象表現にとどまらず抽象表現にチャレンジしてもよい。油絵具の特性を理解し、油彩画の表現技術の習得を目標とする。			
授業の概要 基本的な油画技法を学びながら、現代絵画の今日的あり方を模索する。油画が発展してきた過程を、制作を通して追体験する。授業は技術を磨くことに大半の時間を費やすこととなるが、表現行為に盲目的に没入せず、絵画がなし得る意味をも考察する。			
授業計画 第 1 回 ガイダンス (授業内容と各課題の目標について) 第 2 回～第 4 回 「 勇氣づけられる絵画 」 自由油画の制作 / F4～6 号 第 5 回 講評会、自己紹介 ＜第 2 回～第 5 回の内容＞ * 各自の生活空間に飾ることを前提に、自分自身を「勇氣づける絵画」を制作し、油画表現の魅力に触れる 第 6 回～第 8 回 「 モチーフに想いを込める静物画 」 静物油画の制作 / F8～F15 号 第 9 回 講評会 ＜第 6 回～第 9 回の内容＞ * 静物画を制作し、静物油画の技術 (質感表現、空間表現、画面構成など) を学び習得する * 秋田の特産品や工芸品と各自の私物を組み合わせて各自モチーフを設置し、そのモチーフから得たイメージを自由に膨らませ表現する魅力を体感する 第 10 回～第 14 回 「 男と女 」 人物油画の制作 / F15～30 号 第 15 回 講評会、まとめ ＜第 10 回～第 15 回の内容＞ * 人物ヌードまたは、コスチューム画を制作し、人物油画の技術 (人体骨格、空間表現、画面構成など) を学び習得する * 人物表現の魅力と画面構成の楽しさを体感する * 人体の基礎的な表現のみにとどまらず、「男と女」を自分なりに解釈し、より進んだ表現を模索する			
授業時間外の学習内容等 授業時間外にも各自制作を進めること。			
評価方法 授業への取り組み 40%、課題の成果 60%			
履修上の注意 ドローイングや油画制作に必要な用具を各自準備すること。			
テキスト 授業中にレジュメ (演習用補助教材) を必要に応じて適宜配布する。			
参考書・参考資料等 必要に応じて適宜指示する。			

授業科目名	ものづくり作図演習 実 Technical Drawing	担当教員名	今中 隆介
時間割	水曜日 1 時限	オフィスアワー	
授業科目区分	専門科目－専門共通科目－専門基礎科目		
履修区分	選択科目	授業形態	演習
配当年次・学期	2 年次前期	単位数	2 単位
前提とする授業科目、密接に関係する授業科目 「ものづくりデザイン演習 1 (PD-B)」の履修を前提とする。			
授業に関連するキーワード 「投影法」「尺度」「三面図」「製図」「立体」「空間」			
授業の到達目標及びテーマ 三次元立体を二次元の図面として表現し、第三者に対して正確に情報を伝える力、図面を読み取る力を修得させる。作図によって構想するモノの形／寸法／部材関係／仕上げ等を表すことで、提案を具体的な製品として製造し流通させるための重要なツールとなる。投影図法の理解から、三面図（第三角法）や透視図法など段階を追って指導し、読み取りやすく伝わりやすい図面作成を目指す。			
授業の概要 投影法・尺度の理解と、製図用具の使い方、製図に使う線の太さと線種、図形の表し方（作図法）を理解する。各種記号および寸法線、作図に関わる部材や仕上げ情報などの記入法を理解する。 インテリア・特注家具設計および設計施工監理の経験を生かして、二次元である図形から三次元化に至る感覚的ギャップを補完する授業内容となっている。			
授業計画 ・第1回：図面の目的・・・具体的な作図事例を示し解説する ・第2回：図面の基礎知識・・・投影法（第三角法）、尺度（縮尺）、線の種類などについて ・第3回～5回：課題1「基本的な造形物の作図」・・・第三角法による三図面を作成 ・第6回：課題1で作図した図面の立体化・・・ペーパーモデル ・第7回：課題2「書棚の設計」・・・ラフスケッチから提案を決定、作図準備 ・第8回～11回：課題2「書棚の設計」・・・第三角法による三図面を作成、モデル化の準備 ・第12回：課題2で作図した図面の立体化・・・スチレンボードモデル ・第13回～15回：課題3「トレース」・・・実践図面の読み取りと作図			
授業時間外の学習内容等 毎回の課題は規定の授業時間の 2 倍のボリュームを設定する。毎回次週までの授業時間外を利用し、設定された課題をこなしつつ授業計画に則って授業を進める。			
評価方法 3～6回の演習（課題1）を 30%、7～11回の演習（課題2）を 40%、13～15回の演習（課題3）を 30%として、総合評価する。			
履修上の注意 基本的な製図用具の準備（シャープペンシル 0.3/0.5/0.7mm、三角定規、コンパス、消しゴム、字消板、製図用ブラシ、勾配定規、三角スケール、ほか） ※ 各回の順番は、授業進行の状況により変わることがあります。			
テキスト 各回の内容に合わせたテキストを適時作成し、配布します。			
参考書・参考資料等 美術系図学・製図（堤浪夫著/鳳山社）			

授業科目名	映像デザイン基礎演習 Basic Motion Graphics Design	担当教員名	萩原 健一
時間割	木曜日 5 時限	オフィス	
授業科目区分	専門科目-専門共通科目-専門基礎科目		
履修区分	選択科目	授業形態	演習
配当年次・学期	2 年次前期	単位数	2 単位
前提とする授業科目、密接に関係する授業科目			
授業に関連するキーワード			
授業の到達目標及びテーマ 高精細ディスプレイや携帯端末など、多様化する映像メディアの特性を理解しながら、表現の可能性について考察し、個々の研究制作に応用できる力を身につけます。個人またはグループでの成果物の展示/上映を企画します			
授業の概要 この授業では「映像」を用いて作品制作と発表をおこないます。カメラ、モニター、プロジェクター、Adobe After Effects、Premiere などのツールに触れ、撮影・生成/編集・加工/表示・投影に必要な基礎知識を習得します。			
授業計画 第1回～第3回 技法と表現「うごく絵・アニメーション/モーショングラフィック」 第4回～第5回 技法と表現「光と影・視覚装置」 第7回～第8回 技法と表現「投影/プロジェクション」「表示/ディスプレイ」 第9回～第11回 技法と表現「Audio/Visual Art・音と映像」 第12回 技法と表現「インタラクティブ映像」 第13回 技法と表現「Generative Art 生成される映像」第 14回 技法と表現「フィジカルコンピューティング」 第15回 技法と表現「空間と映像・マルチスクリーンとデジタルサイネージ」			
授業時間外の学習内容等			
評価方法 制作姿勢を50%、成果作品を50%で評価し、合計100%の内60%以上を単位認定要件とする。			
履修上の注意 授業計画の各回テーマは履修学生の志向によって、流動的に組み合わせりながら進行します。授業時間外での作業時間を必要となります。 情報共有の為に、LINE、Google などのアカウントが必要となる場合があります。 履修者多数の場合は履修制限を行います。 ※教職履修者は夏期集中で開講、通常授業は教職履修者以外の学生対象とします。			
テキスト 特になし			
参考書・参考資料等 授業内で適宜紹介/配布します。			

授業科目名	写真技術基礎 実 Basic Photography	担当教員名	阪口正太郎
時間割	火曜日 1、2 時限	オフィス	インフォメーションに確認してください
授業科目区分	専門科目—専門共通科目—専門基礎科目		
履修区分	選択科目	授業形態	演習
配当年次・学期	2 年次前期 (9 週～16 週)	単位数	2 単位
前提とする授業科目、密接に関係する授業科目			
授業に関連するキーワード 光、時間、現像、露出、絞り、プリント、画質			
授業の到達目標及びテーマ 「写真撮影」について技術と事例の両面から理解し制作することが到達目標となる。カメラの基本構造とシャッタースピード、絞り、レンズ選択、測光等からなる写真撮影技術について総合的に知識・技法を学ぶことがテーマとなる。			
授業の概要 カメラの性能と情報処理能力が向上し撮影や出力において人間が判断していた行為のほとんどが自動化しているが、この演習では、技術の基礎を確認しながら制作演習を行う。また事例を紹介し写真表現の持つ可能性と広がり进行を考察する。純粋な写真表現だけでなく、美術としての写真、ヴィジュアルデザインのファクターとしての写真、広告表現写真の機能などについても担当教員のアートディレクターとしての広告制作やビジュアル開発の観点から合わせて解説する。参加学生の技術進度に合わせ授業計画の内容は前後しながら進行する。*一眼レフカメラ持参での受講が基本前提。			
授業計画 第 1 回 ガイダンス／写真の歴史・カメラの基本的な構造、露出／事例紹介 (1) 第 2 回 絞りを変化させる／事例紹介 (2) / 課題 1 第 3 回 光・光量を測る／事例紹介 (3) / 課題 2 第 4 回 シャッタースピードを変化させる／事例紹介 (4) / 課題 3 第 5 回 レンズ選択による変化と画角について／事例紹介 (5) / 課題 4 第 6 回 スタジオでの撮影／ヒトを撮る／事例紹介 (6) / 課題 5 第 7 回 色と色温度の理解・ISO…ホワイトバランス・光量を測る／事例紹介 (7) / 課題 6 第 8 回 現像、プリント、画像の変化／事例紹介 (8) / 課題 7			
授業時間外の学習内容等			
評価方法 提出作品の水準 時間外での課題の制作が前提となる			
履修上の注意 技術について特別講師を招聘する。予定により日程は随時変更される。			
テキスト 特になし			
参考書・参考資料等 写真の教科書 (大和田良 著)			

授業科目名	日本画演習	担当教員名	村山修二郎 大関智子
時間割	金曜日 4、5 時限	オフィスアワー	金曜日 13 時～14 時 (村山研究室)
授業科目区分	専門科目－専門共通科目－専門基礎科目		
履修区分	選択科目	授業形態	演習
配当年次・学期	2 年次後期	単位数	2 単位
前提とする授業科目、密接に関係する授業科目 とくになし			
授業に関連するキーワード 自然素材、フィールドワーク、分析研究、日本の絵画、記録とまとめ			
授業の到達目標及びテーマ <p>この授業では日本画の領域を介して、描画の根源的な素材を知ることと、日本の絵画の歴史の理解を講義や演習などで深める。日本画の素材と表現を体感するため、実際に美術館などで生の日本画を見ることで表現の追体験と本質を見極める。また、描画で使う顔料を自身で探すフィールドワークから素材を知り、日本画の素材を多角的な角度から学んで行く。</p> <p>制作する実技では、基本的な技法を学びながら、完成までの日本画の一連の制作工程を体験する。ただ、今日本画演習では、一般的な日本画の技法を体験することだけでなく、日本画の材料などから自身の表現に転化して行くことをねらいとしている。</p>			
授業の概要 <p>日本画の描画材料を知ると言う上で、市販されている顔料や墨からでない身近な自然の描画素材を、各自がフィールドワークをしながら見つけることから始める。太古からの日本の歴史を踏まえても、自然に触れ自然から学び深めて行くことが、日本画の理解につながるため、制作前の段階に時間を要する。そして、様々な描画素材と、自然物である膠などのメデュームの理解も同時に実践の描く中で試し体感していく。本制作では、和紙や絹などの支持体のなどの特性も学ぶ。</p> <p>資料などの写真からではなく、生の自然素材をモチーフとしてじっくり観察し描画することから、日本画の基礎的な技法も体得していく。その他、演習の様々な実践の過程を記録し、各自が一冊のポートフォリオにまとめる。これは、一つの表現を生み出す仕組みと自己の活動を振り返り理解するため。</p>			
授業計画 <p>第 1 回 導入・授業内容と日本画について (材料の説明・パネル水張り・事前課題提出) 第 2 回 素材実験① 胡粉と水干絵の具 第 3 回 素材実験② 岩絵の具 (絵の具づくり) 第 4 回 素材実験③ 岩絵の具を用いたサンプル制作/素描第 5 回 素材実験④ 箔 (様々な箔と、箔の腐食) 第 6 回 素材実験⑤ 自由実験 (素材の組み合わせとその可能性) 第 7 回 鑑賞 (日本画、ドローイングなど) 第 8 回 制作のためのスケッチ、取材 (素材探しなど) 第 9 回 制作① 下図制作 (スケッチを下絵におこす) 第 10 回 制作② 下絵写し、骨描 (墨による下描き) 第 11 回 制作③ 下地づくり (下塗り) 第 12 回 制作④ 着彩 1 第 13 回 制作⑤ 着彩 2 第 14 回 制作⑥ 着彩 3 第 15 回 合評 完成作品の評価とアドバイス</p>			
授業時間外の学習内容等 <p>事前課題があります。授業内作業のため授業外での事前準備や制作等を進めてもらう必要があります。授業ポートフォリオ作成。</p>			
評価方法 <p>講評の時の作品を 30 点、授業への取り組みを 40 点、授業ポートフォリオを 30 点。この 3 つの合計 100 点満点で評価する。</p>			
履修上の注意 <p>日本画材料は、必要に応じて購入が必要となります。事前の日本画演習説明会の出席を必須とします。</p>			
テキスト <p>日本画の材料や技法などの資料のコピーを適宜配布。</p>			
参考書・参考資料等 <p>参考になる日本画の図録などを適宜紹介していく。</p>			

授業科目名	彫刻演習 Sculpting Seminar	担当教員名	藤 浩志
時間割	金曜日 4、5 時限	オフィスアワー	
授業科目区分	専門科目-専門共通科目-専門基礎科目		
履修区分	選択科目	授業形態	演習
配当年次・学期	2 年次後期	単位数	2 単位
前提とする授業科目、密接に関係する授業科目			
授業に関連するキーワード			
授業の到達目標及びテーマ <p>この授業では石材および木材による彫刻の制作を行う。その制作を通じて、カービング（素材を削ること）技術による制作プロセスを知り、その可能性を深める。</p> <p>自然物の形態を深く観る事によって対象物の構造や特徴を探り、観察力や洞察力を養う。またそれぞれの素材の加工技術および道具、工具等の扱い方を学び、実際に素材に向き合い加工することで、立体作品の制約を学び、その制約を活かすという自然の素材を扱う彫刻の発想力と技術を習得し、それぞれの活動への連鎖を模索する。</p>			
授業の概要 <p>石材、木材などの素材についてのガイダンス、加工技術の体験を通し、過去の作品の研究およびディスカッションなどを行い作品制作のプランニングを行う。素材加工に必要な技術や道具、工具の使い方等の説明を行った後に、実際にカービングの実技に入り、最終的に制作した作品についてのプレゼンテーション、講評を行う。</p>			
授業計画 第 1 回 ガイダンス（授業日程の説明など）。素材と道具の基礎体験 第 2 回 木彫の技術や道具等の説明と基礎的加工体験。プランニング 第 3 回 加工の作品の研究とディスカッション、プランニング、制作体験 第 4 回 加工の作品の研究とディスカッション、プランニング、制作体験 第 5 回 木彫および石彫の制作 手道具等による面出し 第 6 回 木彫および石彫の制作 手道具等によるあら取り第 7 回 木彫および石彫の制作 電動工具等によるあら取り第 8 回 木彫および石彫の制作 中間講評 第 9 回 木彫および石彫の制作 ダイヤモンド工具等による細部制作 第 10 回 木彫および石彫の制作 ダイヤモンド工具等による細部制作 第 11 回 木彫および石彫の制作 砥石、ペーパー等による研磨作業第 12 回 木彫および石彫の制作 砥石、ペーパー等による研磨作業第 13 回 木彫および石彫の制作 仕上げ作業 第 14 回 木彫および石彫の制作 仕上げ作業 第 15 回 プレゼンテーションと講評			
授業時間外の学習内容等			
評価方法 授業への取り組み、最終的なプレゼンテーション、講評等総合的に採点する。			
履修上の注意 履修者は作業安全確保の為、定員を 10 名とする。また材料、消耗品費として五千円程度が必要。作業工程で粉塵が出るので、作業着、防塵マスク・メガネ、安全靴、軍手、耳栓等各自で用意すること。制作時間として課外時間などの活用も考慮すること。			
テキスト 特になし			
参考書・参考資料等 特になし 各自リサーチし発表してもらいます。			

授業科目名	コミュニケーションデザイン・ディレクション Communication Design & Direction 実	担当教員名	阪口 正太郎 水田 圭
時間割	金曜日 2 時限	オフィス	
授業科目区分	専門科目－専門共通科目－専門基礎科目		
履修区分	選択科目	授業形態	演習
配当年次・学期	2 年次後期	単位数	2 単位
前提とする授業科目、密接に関係する授業科目			
授業に関連するキーワード			
授業の到達目標及びテーマ 代表的なアプリケーションとしてAdobe Creative Suite (Illustrator、PhotoShop、InDesign 等) の理解と修得、およびコミュニケーションデザインの基礎となるイメージ表現力の醸成が到達目標となる。これらに加え、情報とデザインに共通する基礎を理解し、デザイン作品の制作がテーマとなる。			
授業の概要 コミュニケーションデザインの概念は、現在では印刷をはじめ他メディアとの情報共有と連携において、中核を担っている。高度なコミュニケーションデザインの実現には情報の理解、編集、デザインの技術が必要である。技術とデザイン思考の両面から指導をおこなうとともに、誌面レイアウト、デザイン事例、出版・印刷知識などを紹介、解説する。学びを深めるため授業の全体像や前後の内容を含めて学ぶ。			
授業計画 第 1 回 全体ガイダンス 第 2 回 文字の基本的な扱いと組み／イメージ表現① 第 3 回 図形 基本図形とレイアウトの基礎／イメージ表現② 第 4 回 写真①基本的な扱い／イメージ表現③ 第 5 回 写真② 加工／イメージ表現④ 第 6 回 ベジェ曲線によるデッサンとデザインの共通点／イメージ表現⑤ 第 7 回 ポスター・チラシの制作①情報（文字と写真）構造の理解 第 8 回 ポスター・チラシの制作②DTP と印刷の理解 第 9 回 記事の制作①文字組を色面や明度として理解する。 第 10 回 記事の制作② 文字組みをオブジェクトとして理解する。 第 11 回 記事の制作③意味とオブジェクトの構成を理解する。 第 12 回 小冊子の制作① イメージから共通するフォーマットを作成する。 第 13 回 小冊子の制作② ページ間の流れと構成を意識してディレクションする。 第 14 回 小冊子の制作③ メディアを理解して表現する。 第 15 回 全体講評			
授業時間外の学習内容等			
評価方法 毎回出される小課題を時間外に制作提出し、時間内に評価を受けることが前提となる。毎回の提出作品および発表の水準。技術習得への工夫などを総合的に評価する。			
履修上の注意			
テキスト			
参考書・参考資料等 技術ウェブサイトの紹介もおこなう。各自ソフトウェアマニュアル類を持参可能とする。			

授業科目名	シルクスクリーン版画基礎 Basic Silkscreen Printing	担当教員名	高橋 博美
時間割	金曜日 4、5 時限	オフィス	—
授業科目区分	専門科目—専門共通科目—専門基礎科目		
履修区分	選択科目	授業形態	演習
配当年次・学期	1・2 年次通年	単位数	2 単位
前提とする授業科目、密接に関係する授業科目			
授業に関連するキーワード			
授業の到達目標及びテーマ 「シルクスクリーン」「版画」技術を理解し制作することが到達目標となる。紙とインクの特徴を理解し、印刷技術について知識・技法を学ぶことがテーマとなる。			
授業の概要 様々なメディアがデジタル化し印刷が自動化する中、紙とインクなどの特徴は無視されがちである。しかし表現をする上ではこれらの素材感を理解する必要がある。この授業ではシルクスクリーンの基礎技術、素材、特に紙の特性や印刷の質感に対する感性を養成する。さらに版画技法を理解し制作に応用・発展する力を身につける。これらの技法を学び、メディアの理解を深める。学びを深めるため参加学生の技術進度に合わせ授業計画の内容は前後しながら進行する。			
授業計画 第 1 回 全体ガイダンス シルクスクリーン 原画制作 第 2 回 課題 1 シルクスクリーン 製版 第 3 回 課題 1 シルクスクリーン 印刷 第 4 回 課題 1 シルクスクリーン 印刷 第 5 回 課題 1 シルクスクリーン 講評 第 6 回 課題 2 シルクスクリーン多色刷 原画制作 第 7 回 課題 2 シルクスクリーン多色刷 製版 第 8 回 課題 2 シルクスクリーン多色刷 印刷 第 9 回 課題 2 シルクスクリーン多色刷 講評 第 10 回 課題 2 木版または銅版 原画制作・製版 第 11 回 課題 3 木版または銅版 製版 第 12 回 課題 3 木版または銅版 製版 第 13 回 課題 3 木版または銅版 印刷 第 14 回 課題 3 木版または銅版 印刷 第 15 回 課題 3 木版または銅版 印刷 講評 全体講評			
授業時間外の学習内容等			
評価方法 提出作品（50%） 十分な準備など受講姿勢（50%）			
履修上の注意 原画の制作など時間外での制作が前提となる。日程は随時変更される。 紙代、インク代、製版材料など消耗品について材料費の負担が必要になる。 機材の関係から履修学生の選抜をおこなう場合がある。			
テキスト なし			
参考書・参考資料等 適宜プリント配布、事例紹介等、必要に応じ各自参照可能とする。			

授業科目名	ブランディングデザイン演習 実 Branding Design	担当教員名	孔 鎮 烈
時間割	木曜日 2 時限	オフィスアワー	
授業科目区分	専門科目-専門共通科目-専門基礎科目		
履修区分	選択科目	授業形態	演習
配当年次・学期	2 年次後期	単位数	2 単位
前提とする授業科目、密接に係る授業科目 「コミュニケーションデザイン演習 A1」、「コミュニケーションデザイン演習 A2」、「コミュニケーションデザイン演習 A3」と内容が関連している。			
授業に関連するキーワード パッケージデザインの機能、役割、プロセス			
授業の到達目標及びテーマ 商品の価値を消費者に知ってもらうための一番身近な手段が、パッケージデザインであり、パッケージを通じて消費者と上手くコミュニケーションを取ることが本授業のテーマである。 競合商品が数多くある売り場で、他の商品よりも早く消費者の目に留まり、商品の特性を理解してもらい、買いたいと思ってもらう。また、消費者と商品との素晴らしい出会いを演出し、第一印象を決めるデザイン能力を身につけることを目標にする。			
授業の概要 本授業ではパッケージの基本機能から役割にいたるプロセスを学習し、様々な形態で制作された実例を通じて良さや問題点など様々な視点から分析する。その上、分析結果に基づいた新たなパッケージデザインの提案を行う。			
授業計画 第 1 回 授業のガイダンス及び「ブランディングデザイン」とは何かについて 第 2 回 【地域のブランディングを理解する】 地域でブランディング展開しているデザイナーから現状を聞く。 第 3 回 【パッケージの役割を理解する】 アップルに学ぶ、パッケージの 4 つの機能「高める、届ける、演出する、伝える」 第 4 回 【デザインのプロセスを理解する】 パッケージデザインをするには正しい手順が必要である。 第 5-10 回 【パッケージをデザインする】 デザインプロセスに沿った演習を行う。 第 11 回 【中間講評】 デザイン案に対する客観的な意見を聞く。 第 12-14 回 【パッケージをデザインする】 中間評価で見えた問題点などを踏まえて修正し完成する。 第 15 回 【最終講評】 最終プレゼンテーション ※ 授業時間外に各自制作を進めること。			
授業時間外の学習内容等 課題内容に関連する情報の収集および分析など授業内作業のための事前準備が必要になる。			
評価方法 作品評価は、制作過程(20%)、独創性(20%)、表現力(10%)、共感力(20%)などを重視し総合 70%で評価する。また、授業への取り組み姿勢を 30%で評価して、合計 60%以上を単位認定要件とする。			
履修上の注意 履修希望者数が設備機器数を超過する場合はコミュニケーションデザイン専攻 2 年生を優先し選抜する。			
テキスト 必要に応じて資料を適宜配布する。			
参考書・参考資料等 地ブランド (弘文堂)、アイデアのレッスン (ちくま文庫)、創造性とは何か (祥伝社新書)			

授業科目名	立体造形基礎演習 3D Modeling Method Basic Seminar	担当教員名	水田圭
時間割	火曜日 1 時限	オフィスアワー	月・金 3 時限、火・木 2 時限、 水 4 時限
授業科目区分	専門科目－専門共通科目－専門基礎科目		
履修区分	選択科目	授業形態	演習
配当年次・学期	2 年次後期	単位数	2 単位
前提とする授業科目、密接に関係する授業科目 「ものづくりデザイン演習 1・2・3」「プロダクトデザイン演習」「プレゼンテーション演習」			
授業に関連するキーワード 「デザイン」「コミュニケーションデザイン」「生活」「工芸」「プロダクトデザイン」			
授業の到達目標及びテーマ 「想い」や「発想」を 2 次元で表現する為の「スケッチ」の様に、それらを立体的に表現するために必要な感覚や技術があります。素材や対象の持つ特性や魅力を見つける感覚と、見つけた価値を立体的に可視化する技術を、デザイン・工芸的な手法を通じて修得する事を目指します。			
授業の概要 複数の素材とテーマやモチーフを用いて、毎週課題を制作し講評する方式で進行します。少しハードですが、着実に観察力ります造形力が高まります。			
授業計画 1 回■ガイダンス ・ 描画課題 1 出題 描画指導 2 回■描画課題 1 講評 ・ 描画課題 2 出題 描画指導 3 回■描画課題 2 講評 ・ 立体課題 1 出題 制作方法指導 4 回■立体課題 1 講評 ・ 立体課題 2 出題 制作方法指導 5 回■立体課題 2 講評 ・ 立体課題 3 出題 制作方法指導 6 回■立体課題 3 講評 ・ 立体課題 4 出題 制作方法指導 7 回■立体課題 4 講評 ・ 立体課題 5 出題 制作方法指導 8 回■立体課題 5 講評 ・ 立体課題 6 出題 制作方法指導 9 回■立体課題 6 講評 ・ 立体課題 7 出題 制作方法指導 1 0 回■立体課題 7 講評 ・ 立体課題 8 出題 制作方法指導 1 1 回■立体課題 8 制作 1 2 回■立体課題 8 講評 ・ 立体課題 9 出題 制作方法指導 1 3 回■立体課題 9 講評 ・ 立体課題 10 出題 制作方法指導 1 4 回■立体課題 10 制作 1 5 回■立体課題 10 講評 ・ 総評			
授業時間外の学習内容等 毎回出される小課題を時間外に制作提出し、時間内に評価を受けることが前提となります。			
評価方法 各課題の提出とその点数(評価点)の合算を最終評価とします。			
履修上の注意 F 4 程度のスケッチブック (クロッキー帳も可) と描画材 (鉛筆・色鉛筆・その他)。粘土ヘラ一式、カッターやはさみ及び接着剤、ペンチやニッパー等、その他材料費が別途必要。			
テキスト 必要に応じて資料を適宜配布します。			
参考書・参考資料等 必要に応じて資料を適宜配布します。			

授業科目名	3D・CG 表現演習 1 3D/Computer Graphics 1	担当教員名	近藤 康洋
時間割	水曜日 5 時限	オフィス	
授業科目区分	専門科目－専門共通科目－専門基礎科目		
履修区分	選択科目	授業形態	演習
配当年次・学期	2 年次後期	単位数	1 単位
前提とする授業科目、密接に係る授業科目			
授業に関連するキーワード			
授業の到達目標及びテーマ 制作を行っていくうえで必要な技術・ワークフローの基礎を習得する程度。			
授業の概要 新しいイメージ、あるいは他のツールの仕様では表現困難なイメージが、3DCG ソフトによって表現可能になる場合が多くある。この授業では、「3DCG」に対する理解と、ソフトウェアの基本的な使い方、及び現行の映像・アニメ・ゲーム等 3DCG 関連業界の価値観・世界観を、3DCG の静止画・アニメーション作品の課題制作を通して教授する。 (全 15 回) ①制作工程の概要、アプリケーションの基本操作等インターフェースについて学習し、ポリゴンモデリング/テクスチャリング/マテリアルシェーダーによる質感の設定や UV マッピングの概念を解説。 ②シーン構築に必要な、ライティングによる演出や効果的なカメラワークについて解説。 ③キーフレームアニメーションやオブジェクトの階層構造を使ったアニメーションを制作。			
授業計画 第 1 回 製作工程の概要、3DCG 関連業界の動向を解説 第 2 回 基本操作、インターフェースについて解説 第 3 回-第 6 回 ポリゴンモデリングの基礎を習得 第 7 回-第 10 回 ライティングの基礎を解説 第 11 回-第 14 回 カメラワーク、アニメーションの基礎を解説 第 15 回 後期に向けて制作物の計画を立てる			
授業時間外の学習内容等			
評価方法 (10 点評価) 日々の出席態度 (7 点) 出来上がったものに対して、学んだことを反映しているかを評価 (3 点)			
履修上の注意 メモを取るためのノート、筆記用具持参			
テキスト Maya ベーシックス 3DCG 基礎力育成ブック ISBN-10: 4844366408 ISBN-13: 978-4844366409			
参考書・参考資料等			

授業科目名	彫刻素材基礎演習 1 Sculpture material basic exercise 1	担当教員名	島屋 純晴
時間割	木曜日 4 時限	オフィスアワー	
授業科目区分	専門科目-専門共通科目-専門基礎科目		
履修区分	選択科目	授業形態	演習
配当年次・学期	2・3年次前期	単位数	2 単位
前提とする授業科目、密接に関係する授業科目 ビジュアルアート専攻で履修する演習科目、卒業制作等の立体空間系科目全般に密接に関連する			
授業に関連するキーワード 彫刻立体制作の構築方法、素材やフォルムの根拠について論理的思考をすすめ、作品制作における曖昧な感覚論から脱却することを学ぶ			
授業の到達目標及びテーマ 抽象彫刻作品の内、金属・石材・ガラス等の素材について解説し、それぞれ実材の持つ感覚的側面と物理的側面を知る。作品制作では金属素材の特質に焦点を当て、表現方法、技法の特性を学ぶ事により、抽象彫刻表現の基礎と概念を理解し、以下に示す能力を身につける。			
授業の概要 1：金属・石材・ガラス等を素材とする抽象彫刻の多様な表現を知り理解する。 2：金属素材の特性・特徴と素材がもつ可能性を知る。 3：多様な金属素材の実体験をとおして彫刻素材の基本的な特性を学ぶ。 4：金属による抽象彫刻作品の制作をとおして、なにを表現するのか、表現できるのかを考え抽象表現の可能性を探求する。			
授業計画 第 1 回：ガイダンス（授業全体の説明。多様な素材による抽象彫刻表現の作品解説。） ：抽象彫刻の素材と技法の解説。作品制作の考え方、現実的な進め方の説明。 第 2 回：作品プラン（制作意図、アイデア）の考察・検討とイメージの具現化。 第 3 回：作品プラン（制作意図、アイデア）の発表と実制作の導入・準備。 第 4 回～第 14 回 ：蝋型鑄造及び金属溶接・展延加工による、抽象彫刻の制作 第 15 回：講評会（プラン・制作意図・アイデアと作品の整合性、表現の達成度。）			
授業時間外の学習内容等 事前及び時間外において可能な限り、様々な彫刻立体作品について知識や理解を深めておくこと			
評価方法 制作姿勢（50%）、表現力・思考力・独創性（50%）で評価。 100 点満点で 60 点以上を単位認定要件とする。			
履修上の注意 作業に適した服装、履物等を準備すること。別途材料費等が必要。			
テキスト 必要に応じて指示する。			
参考書・参考資料等 必要に応じて指示する。			

授業科目名	彫刻素材基礎演習 2 Sculpture material basic exercise 2	担当教員名	宮 伸穂、島屋 純晴
時間割	集中講義	オフィスワーカー	各教員による
授業科目区分	専門科目-専門共通科目-専門基礎科目		
履修区分	選択科目	授業形態	演習
配当年次・学期	2・3年次前期	単位数	2単位
前提とする授業科目、密接に関係する授業科目 ビジュアルアート専攻で履修する演習科目、卒業制作等の立体空間系科目全般に密接に関連する			
授業に関連するキーワード 彫刻立体制作の構築方法、素材やフォルムの根拠について論理的思考をすることを学び、作品制作における曖昧な感覚論から脱却する			
授業の到達目標及びテーマ 金属作品制作上の技法の深化を目的に、手法との素材について解説する。作品制作では金属素材の特質に焦点を当て、表現方法、技法の特性を学ぶ事により、作品表現の基礎と概念を理解し、以下に示す能力を身につける。			
授業の概要 1：金属素材の特性・特徴と素材がもつ可能性を知る。 2：多様な金属素材の実体験をとおして素材の基本的な特性を学ぶ。 3：金属作品の制作をとおして、なにを表現するのか、表現できるのかを考え表現の可能性を探求する。			
授業計画 第 1 回：ガイダンス（授業全体の説明。多様な素材による立体表現の作品解説。） ：抽象立体の素材と技法の解説。作品制作の考え方、現実的な進め方の説明。 第 2 回：作品プラン（制作意図、アイデア）の考察・検討とイメージの具現化。 第 3 回：作品プラン（制作意図、アイデア）の発表と実制作の導入・準備。 第 4 回～第 14 回 ：惣型制作及び金属加工による、抽象立体作品の制作 第 15 回：講評会（プラン・制作意図・アイデアと作品の整合性、表現の達成度。）			
授業時間外の学習内容等 事前及び時間外において可能な限り、様々な金属の立体作品について知識や理解を深めておくこと			
評価方法 制作姿勢（50%）、表現力・思考力・独創性（50%）で評価。 100点満点で60点以上を単位認定要件とする。			
履修上の注意 彫刻素材基礎演習 1 を受講していること。事前にプランニングシート提出が必要。 作業に適した服装、履物等を準備すること。別途材料費等が必要。			
テキスト 必要に応じて指示する。			
参考書・参考資料等 必要に応じて指示する。			

授業科目名	イラストレーション演習 1 Illustration exercise 1	担当教員名	小田 英之
時間割	木曜日 3、4 時限	オフィスアワー	木曜日 5 時限
授業科目区分	専門科目—専門共通科目—専門基礎科目		
履修区分	選択科目	授業形態	演習
配当年次・学期	2・3 年次前期	単位数	2 単位
前提とする授業科目、密接に関係する授業科目 特になし			
授業に関連するキーワード イラストレーション、イラスト、デジタル絵本、Keynote			
授業の到達目標及びテーマ デジタル技術も含めた多様なイラストレーションの表現、手法、情報の視覚化についての理解と技術を学ぶ。			
授業の概要 イラストレーション制作を物語の視覚表現などの課題制作を通じて学ぶ。イラストレーションはデジタル絵本にまとめるが、それぞれの個性や発想を重視する。作品は基本的に画材などによる描画によるものとするが、発表はデジタル化した動画形式でおこなう。			
授業計画 第 1-2 回 ガイダンス 1 「イラストレーションとは？」 課題について／デジタル絵本制作の準備 第 3-4 回 イラストレーション制作 1、2 第 5-6 回 イラストレーション制作 3、4 第 7-8 回 イラストレーション制作 5、6 第 9-10 回 ガイダンス 2 「編集、出力について」 イラストレーション制作 7 第 11-12 回 デジタル絵本制作 1 (オーサリング 1) 第 13-14 回 デジタル絵本制作 2 (オーサリング 2) 第 15 (-16) 回 作品上映／鑑賞／評価			
授業時間外の学習内容等 制作の準備や授業時間内に収まらない作画などをおこなう必要がある。			
評価方法 授業への取り組み 20% 課題の成果 80%			
履修上の注意 Apple Macintosh の基本操作および Adobe Photoshop、Illustrator の基本操作ができることが望ましい。実習には画材を使用するため各自用意すること。(画材：デッサン用具、ドローイングや着色のための基本的な用具、作画用紙、USB メモリー、SD カードなどの記憶メディアなど)			
テキスト 適宜、指示する。課題シート、制作ノートなど			
参考書・参考資料等 適宜、指定する			

授業科目名	デザイン・サーベイ（景観） <i>Design Survey (Landscape)</i>	担当教員名	岸 健太
時間割	木曜日 4・5 時限	オフィス	授業内で指示する
授業科目区分	専門科目－専門共通科目－専門基礎科目		
履修区分	選択科目	授業形態	演習・講義
配当年次・学期	2・3 年次前期	単位数	2 単位
前提とする授業科目、密接に関係する授業科目			
「空間表現演習 1（前期前半：火曜）」および「空間表現演習 2（前期後半：火曜）」を併せて受講することで高い学習効果が期待できる。			
授業に関連するキーワード			
フィールドワーク、ドキュメンテーション、アーバンスタディーズ、質的調査（社会学）			
授業の到達目標及びテーマ			
景観（ランドスケープ）をフィールドワークや資料などから読み解き、その結果を視覚情報化する理論と手法を学びます。景観に関与するパブリックアートプロジェクトやランドスケープデザインなど、様々な活動の計画立案と資料作成の技術の習得を目標とします。			
授業のテーマは「景観の読解と記述（ランドスケープ・リテラシー）」です。テーマの理解のために、授業では調査と制作の活動に加えて、景観に関わるアートプロジェクトの事例やデザイン理論の紹介もおこないます。			
授業の概要			
身体や日常の行動のスケールから「場所」の調査・分析と制作の作業を開始します。その後徐々に対象の範囲を広げ、最終的には「景観の公共性」について考察します。			
授業計画			
第 1 回 オリエンテーション（授業のテーマ・目的・計画の説明）			
第 2 回 景観を読む（「場所」を質的に理解する）			
第 3 回 景観を記す（視覚的記述と言語的記述について）			
第 4 回 実践①：『私を中心とする半径 1 m の景観』（トライアル制作＋意見交換）			
第 5 回 実践②：『地形を歩く私（断面情報）』（フィールドワーク＋実地制作）			
第 6 回 実践②：『地形を歩く私（複合情報）』（フィールドワーク＋実地制作）			
第 7 回 実践③：『不在の景観（失われた風景を探る旅）』（資料調査＋フィールドワーク＋実地制作）			
第 8 回 実践③：『不在の景観』（同上＋発表）			
第 9 回 実践④：『路上収集物品の分析』（フィールドワーク＋制作）			
第 10 回 実践④：『路上収集物品の分析』（同上＋発表）			
第 11 回 実践⑤：『不在の空間（人・空間・ネグレクトの関係）』（講義＋ディスカッション）			
第 12 回 実践⑤：『不在の空間』（トライアル制作＋ディスカッション）			
第 13 回 実践⑤：『不在の空間』（フィールドワーク＋実地制作）			
第 14 回 実践⑤：『不在の空間』（フィールドワーク＋実地制作）			
第 15 回 実践⑤：発表と講評			
授業時間外の学習内容等			
授業内で紹介された資料の理解に取り組む			
評価方法			
前半演習課題（50％）後半演習課題（50％）			
履修上の注意			
<ul style="list-style-type: none"> ・教材（用具と素材＝授業内で指示）と現地調査のための交通費は個人負担とします ・授業時間以外の作業が必要な場合があります ・授業の進行に応じて授業計画の内容は適宜調整します 			
テキスト			
授業内で紹介する			
参考書・参考資料等			
授業内で紹介する			

授業科目名	空間表現演習 1 Space representation training 1	担当教員名	菅原香織 森山 香、小杉栄次郎
時間割	火曜日 1・2 時限	オフィスアワー	各教員による
授業科目区分	専門科目－専門共通科目－専門基礎科目		
履修区分	選択科目	授業形態	演習（複数教員）
配当年次・学期	2 年次前期	単位数	2 単位
前提とする授業科目、密接に関係する授業科目 【前提科目】図学製図 【密接科目】空間表現演習 2、デザインサーベイ（景観）間計画演習			
授業に関連するキーワード パース、建築模型、空間デザイン			
授業の到達目標及びテーマ 著名建築をモチーフとして、前半は空間デザインや建築などの完成予想イメージを伝達するパースなどの平面表現技法を習得し、後半は量塊、面材、棒材等のさまざまな材料を用いた空間の模型制作等、立体表現の技法を習得することを目標とします。授業を通して、空間デザインのスタディーやプレゼンテーションのツールとして習得した技術を有効に活用できるようになることが本授業のテーマです。			
授業の概要 前半は、透視図・建築図面の基礎を学び、写真や図面から空間を描く技法を修得します。後半は建築やランドスケープデザインにおける空間表現として有効な模型製作技術を修得します。著名建築物の設計背景の理解も含め図面からその空間を把握し、各素材の加工方法を習得しつつ模型を作成します。			
授業計画 第 1 回 基礎的な図面の講義（三面図・アイソメ図・アクソメ図・透視図の基本・練習課題） 第 2 回 パースによる表現 1（谷口吉生／土門拳記念館／内観パース） 第 3 回 パースによる表現 2（谷口吉生／土門拳記念館／内観パース） 第 4 回 パースによる表現 3（谷口吉生／土門拳記念館／内観パース） 第 5 回 パースによる表現 4（谷口吉生／土門拳記念館／外観パース） 第 6 回 パースによる表現 5（谷口吉生／土門拳記念館／外観パース） 第 7 回 パースによる表現 6（谷口吉生／土門拳記念館／外観パース） 第 8 回 パースによる表現 7（谷口吉生／土門拳記念館／外観パース） 第 9 回 模型による表現 1（谷口吉生／土門拳記念館／） 第 10 回 模型による表現 2（谷口吉生／土門拳記念館／） 第 11 回 模型による表現 3（谷口吉生／土門拳記念館／） 第 12 回 模型による表現 4（谷口吉生／土門拳記念館／） 第 13 回 模型による表現 5（谷口吉生／土門拳記念館／） 第 14 回 模型による表現 6（谷口吉生／土門拳記念館／） 第 15 回 模型による表現 7（谷口吉生／土門拳記念館／） 第 16 回 最終講評			
授業時間外の学習内容等 授業時間外の作業が見込まれている。			
評価方法 演習の各課題 70%、講評でのプレゼンテーション 20%、授業への取組態度 10%による総合評価			
履修上の注意 A3 トレーシングペーパー、製図用具、カッター、金尺等の用具は学生が用意し、模型材料は基本的に自己負担とするので各自用意すること。 景観デザイン専攻希望者は 2 年次に履修しておくことが望ましい。			
テキスト 授業内で必要に応じて随時紹介する			
参考書・参考資料等 授業内で必要に応じて随時紹介する			

授業科目名	空間表現演習 2 Spatial Representation II	担当教員名	石山友美
時間割	火曜日 1、2 時限	オフィスアワー	授業時に指定
授業科目区分	専門科目－専門共通科目－専門基礎科目		
履修区分	選択科目	授業形態	演習
配当年次・学期	2・3 年次前期	単位数	2 単位
前提とする授業科目、密接に関係する授業科目 「空間表現演習 1」「デザインサーベイ」と内容が関連しており履修が望ましい。			
授業に関連するキーワード			
授業の到達目標及びテーマ 私たちが実際にその身体をおく「空間」には、建築空間から、都市空間、社会空間など、様々なスケールがあります。本授業では、これら多様な「空間」をドキュメントするためのメディアとして、主に、写真、映像、テキスタイルティング、音響を取り上げ学びます。様々な表現メディアへの理解を深めながら、それらを複合的に使用することで、独自の表現手法を獲得することが、この授業の目標です。			
授業の概要 前半は、空間をドキュメントするためのメディアとして、写真、テキスタイルティング、音響、そして映像の技術を学んでいきます。それぞれのメディアについて、ミニ課題があり、与えられたテーマに沿って、表現手法、技術を習得していきます。 後半は、テーマ、メディアを各自が自由に設定し、自分に合ったメディアを駆使しながら、テーマに沿った映像作品を制作します。			
授業計画 第 1、2 回 映像、写真 照明技術 レクチャー、演習 第 3、4 回 写真、テキスタイルティングによる空間表現 第 5、6 回 写真、テキスタイルティングによる空間表現 第 7、8 回 音響による空間表現 第 9、10 回 映像による空間表現 第 11、12 回 映像による空間表現 第 13、14 回 映像による空間表現 第 15、16 回 最終講評会 ※照明技術、音響技術については、それぞれプロとして活躍されている特別講師の方にレクチャー、及び演習の授業をしていただく予定です。			
授業時間外の学習内容等 課題のための事前準備が必要になります。			
評価方法 各課題の評価 40%、最終課題の評価 60%			
履修上の注意			
テキスト 授業中にテキストのコピー等を適宜配布します。			
参考書・参考資料等			

授業科目名	現代絵画演習 Modern Drawing & Painting	担当教員名	大谷 有花
時間割	木曜日 4、5 時限	オフィスアワー	
授業科目区分	専門科目－専門共通科目－専門基礎科目		
履修区分	選択科目	授業形態	演習
配当年次・学期	2・3年次後期	単位数	2単位
前提とする授業科目、密接に関係する授業科目 特になし			
授業に関連するキーワード 現代絵画、オリジナリティー、構築的作品制作			
授業の到達目標及びテーマ 現代社会と自分自身との関係を考察しながら、作品コンセプトを立案する。そして、そのコンセプトをビジュアル化し、オリジナリティーのある絵画を完成させるまでの一連のプロセスを習得することをめざす。			
授業の概要 この授業は、現代絵画制作を中心にしながら、他分野においても制作の根幹となるオリジナリティーを持つ表現の獲得と構築的作品制作を行なうための授業である。①「現代とは何か」、②「自分とは何か」、③「現代美術とは何か」、④「制作する意味とは何か」を問いながら、演習を進めることにより、現代社会と自身との関係性、現代社会（鑑賞者）と作品との関係性を問い、独自の現代絵画を完成させるための思考法と制作プロセスを習得する。作品コンセプトの必要性和重要性を説き、その立案方法を教授する。			
授業計画 第 1 回 ガイダンス（授業内容と各課題の目標について） 第 2 回 アートシード・リサーチノートを用いての分析・考察：テーマ①「現代とは」第 3 回 アートシード・リサーチノートを用いての分析・考察：テーマ②「自分とは」 第 4 回 アートシード・リサーチノートを用いてのドローイング制作（テーマ①と②を融合し、イメージ化する） 第 5 回～第 7 回 油画制作（第 4 回で制作したドローイングに基づく） 第 8 回 講評会、次回課題説明 第 9 回 アートシード・リサーチノートを用いての分析・考察：テーマ③「現代美術とは」（ディスカッション） 第 10 回 アートシード・リサーチノートを用いての分析・考察：テーマ④「作品を制作する意味とは」 （ディスカッション） 第 11 回 アートシード・リサーチノートを用いてのドローイング制作（テーマ①～④を融合し、イメージ化する） 第 12 回～第 14 回 油画制作（第 11 回で制作したドローイングに基づく） 第 15 回 講評会、まとめ * アートシード・リサーチノートとは、本授業における制作研究ノートを意味する			
授業時間外の学習内容等 授業時間外にも各自制作を進めること。			
評価方法 授業への取り組み 40%、課題の成果 60%			
履修上の注意 ドローイングや油画制作に必要な用具を各自準備すること。			
テキスト 「アートシード・リサーチノート」作成のためのレジュメを配布する。			
参考書・参考資料等 ・「現代日本絵画」本江邦夫 著（みすず書房 刊） ・「大谷有花展 life」展覧会カタログ（第一生命ギャラリー 刊） ・新聞各紙、各種郷土資料、秋田県内にある美術館の展覧会カタログ			

授業科目名	メディアアート導入演習 Introduction to Media Art	担当教員名	阿部 由布子
時間割	木曜日 4、5 時限	オフィス	
授業科目区分	専門科目－専門基礎科目		
履修区分	選択科目	授業形態	演習
配当年次・学期	2・3 年次後期	単位数	2 単位
前提とする授業科目、密接に関係する授業科目			
授業に関連するキーワード アート、メディアアート、ニューメディア、プログラミング、表現、制作、展示			
授業の到達目標及びテーマ メディアアートの基本的な成立条件や作品の制作方法、展示手法について学び、時代に相応しいアート表現の可能性について考える。			
授業の概要 メディアアートとは、テクノロジーの進展にともなって発明され普及してきた新しい情報伝達媒体＝ニューメディアを表現に介在させることで、我々が生活インフラとして身近に接している各種のテクノロジーやメディアが人間社会にもたらす影響を捉えようとする批評的な芸術運動／作品である。当該授業科目では、そうしたメディアアートの特性について理解を促すとともに、作品を制作し展示するための基礎的な技法と思考方法を習得することを目指す。			
授業計画 第1回 メディアアートの成り立ちと特性、その可能性と期待される役割について 第2回 ビジュアルプログラミング開発環境の理解と基礎的な演算方法の学習 第3回 プログラミングによる音とリズムの生成・編集方法の学習 第4回 プログラミングによる画像処理法の学習 第5回 マイコンボードと電子回路の理解およびプログラムとの連携方法の学習 第6回～第7回 マイコンボードと電子回路をプログラムで制御する方法の学習 第8回～第11回 画像処理プログラムやセンサーと連動する課題作品の制作 第12回 メディアアート作品の展示方法の学習 第13回～第14回 課題作品展示会場の設営 第15回 課題作品の講評と課題作品展示会場の撤収			
授業時間外の学習内容等 ノートや配布資料等を用いて復習し、授業内容の理解を深めること。			
評価方法 授業への取り組み姿勢40%、提出物60%			
履修上の注意 教室など授業環境面の事情により、履修制限をかける可能性がある。 帯授業のため、2コマ続きで開講される点に注意すること。教材等の実費負担あり。			
テキスト 適宜指示する。			
参考書・参考資料等 適宜指示する。			

授業科目名	Web Design 基礎 実 WebDesignBasic	担当教員名	表 鎮爽
時間割	木曜日 4、5 時限	オフィス	
授業科目区分	専門科目－専門専攻科目－専門基礎科目		
履修区分	選択科目	授業形態	演習
配当年次・学期	2 年次後期	単位数	2 単位
前提とする授業科目、密接に係る授業科目			
授業に関連するキーワード WebDesign、グラフィックデザイン、インフォメーションデザイン、インタラクションデザイン			
授業の到達目標及びテーマ インターネットは情報の発信や収集に大変便利な道具である。本演習では、ウェブの基本である HTML について理解するために、Dreamweaver でページを記述していく。			
授業の概要 この授業では、グラフィックデザイン、インフォメーションデザイン、インタラクションデザインによる正確な情報伝達の方法や、それら 3 つの要素を機能的、かつ効果的にサイトに取り込んでいく手法や考え方を習得し、ユーザーが WEB ブラウジングする際の快適な情報認識・理解を促すインターフェースデザインの制作を目指す。Web ユーザーインタフェースを想定した画面デザインの提案を課題とし、基本的な制作ツール (Dreamweaver) の使い方やサイト制作のプロセスなど、WEB サイト制作の基礎を学ぶ。			
授業計画 第 1 回 ガイダンス、および演習課題の説明 第 2 回 インターネットの仕組み、ウェブサイトの基本知識 第 3 回 Dreamweaver ソフトウェアの使い方 第 4 回 テキスト入力、リンク張り 第 5 回 画像の貼り付け 第 6 回 Web Site デザイン 1 第 7 回 Web Site デザイン 2 第 8 回 Web Site デザイン 3 第 9 回 画像 (バナー、アイコン) の制作 第 10 回 演習課題 1 のテーマ設定 第 11 回 演習課題制作 第 12 回 課題発表と講評、ユーザーインターフェースデザイン 第 13 回 演習課題 2 のテーマ設定 第 14 回 演習課題制作 第 15 回 課題発表と講評			
授業時間外の学習内容等 授業時間外に各自制作を進めること。			
評価方法 授業における演習課題 1 [30%]、演習課題 2 [60%]、課題発表 [10%] で評価し、100 点満点で 60 点以上を単位確定要件とする。			
履修上の注意			
テキスト 資料を配布する。			
参考書・参考資料等 なし			

授業科目名	グラフィック基礎演習 Basic Graphic Design	担当教員名	坂本 憲信
時間割	火曜日 1 時限	オフィスアワー	水曜日 10 : 30 ~ 16 : 00
授業科目区分	専門科目 - 専門共通科目 - 専門基礎科目		
履修区分	選択科目	授業形態	演習
配当年次・学期	2 年次後期	単位数	2 単位
前提とする授業科目、密接に関係する授業科目 コンピュータデザイン演習			
授業に関連するキーワード グラフィックデザイン、ポスター、動画、広告、プレゼンテーション、Mac OS、アドビ・イラストレーター、アドビ・フォトショップ、アップル・キーノート			
授業の到達目標及びテーマ 近年における情報メディアの急速な発達に伴い、情報内容の可視化においては静止画と動画が区別なく柔軟に用いられている。本授業では、静止画と動画それぞれの表現特性を理解し、更に双方を横断的に用いて表現する取り組みを通じて、多様な情報メディアを複合的かつ多角的に駆使して表現展開できるグラフィックデザインの基礎的能力の習得を目指す。			
授業の概要 静止画を用いるプリンティンググラフィック、動画を用いるモーショングラフィック、静止画と動画の双方を用いるプレゼンテーショングラフィックという 3 つのカテゴリーに基づき設定した各表現テーマに対して、アイデア創出から定着までの一連のデザインプロセスをたどりながら構想内容を具現化する。			
授業計画 第 1 回 オリエンテーション ●課題 1. プリンティンググラフィック①「公共的題材に基づくポスター」 第 2 ~ 3 回 制作 第 4 回 講評 ●課題 2. モーショングラフィック「文字や図形などを用いた動画」 第 5 回 プレゼンテーションツール操作ガイダンス 第 6 ~ 7 回 制作 第 8 回 講評 ●課題 3. プリンティンググラフィック②「商業的題材に基づく広告」 第 9 ~ 11 回 制作 第 12 回 講評 ●課題 4. プレゼンテーショングラフィック「これまでの課題のプレゼンテーション」 第 13 ~ 14 回 制作 第 15 回 講評 / 全体のまとめ			
授業時間外の学習内容等 各課題内容に関連する情報の収集および分析、また、表現アイデアの構想など授業内作業のための事前準備が必要になる。			
評価方法 授業態度を 60%、全課題成果を 40% で評価し、合計 100% の内 60% 以上を単位認定要件とする。			
履修上の注意 ・履修希望者数が設備機器数を超過する場合はコミュニケーションデザイン専攻 2 年生を優先し選抜する。 ・「コンピュータデザイン演習」の単位を修得しているか、もしくはそれと同等の操作スキルを有すること。 ・各課題の詳細については授業時に説明する。また、課題内容を一部変更する場合がある。 ・特別講師による講義を予定しており、そのため授業計画を変更する場合がある。			
テキスト 授業中にテキストのコピーを適宜配布する。			
参考書・参考資料等 授業中に適宜紹介する。			

授業科目名	空間計画演習 Spatial Planning	担当教員名	石山友美
時間割	木曜日 2 時限	オフィスアワー	授業時に指定
授業科目区分	専門科目－専門共通科目－専門基礎科目		
履修区分	選択科目	授業形態	演習
配当年次・学期	2 年次後期	単位数	2 単位
前提とする授業科目、密接に関係する授業科目 「空間表現演習 1、2」「デザインサーベイ」と内容が関連しており履修が望ましい。			
授業に関連するキーワード			
授業の到達目標及びテーマ 空間設計の基礎となる考え方を、実際の建築設計のプロセスを順に追い学び、コンセプトメイキングから設計、プレゼンテーションまでの進め方を習得します。 空間とは何か、という根源的な問いかけを常に意識しながら、自由に柔軟な発想を実際の建築設計に活かしていく思考力、表現力を培うことが授業のテーマとなります。			
授業の概要 実際に手を動かして空間設計の基礎を学ぶ授業です。名作建築の先行事例の空間分析をしながら、各自、建物の基本構想から、基本計画までをイメージのスケッチから始め、最終的には、平面図、立面図、断面図、パースの作成、そして、模型の作成と最終的なプレゼンテーションをします。 課題 『母の家』（住宅課題） 用途：平屋建専用住宅 規模：30 坪程度 構造：自由			
授業計画 第 1 回 授業ガイダンス 名作建築の先行事例紹介 第 2 回～5 回 課題制作：名作建築の先行事例 空間分析 第 6 回～8 回 課題制作：イメージスケッチ、コンセプトメイキング 構造、材料の決定 第 9 回～14 回 課題制作：配置計画、平面計画、スタディ模型作成、 断面計画、立面計画、パース、模型の作成 第 15 回 最終課題プレゼンテーション及び講評			
授業時間外の学習内容等 課題のための事前準備が必要になります。			
評価方法 演習課題 80%、授業への取組 20%			
履修上の注意 課題のための材料費は各自の負担とします。			
テキスト 授業中にテキストのコピー等を適宜配布します。			
参考書・参考資料等			

授業科目名	静物素描演習（教職課程） 実	担当教員名	鈴木 司
	Still-Life Sketching (Education Course)		
時間割	水曜日 5 時限	オフィスアワー	火曜日 1 時限 要予約
授業科目区分	専門科目—専門共通科目—専門基礎科目		
履修区分	選択科目	授業形態	演習
配当年次・学期	2・3 年次後期	単位数	2 単位
前提とする授業科目、密接に関係する授業科目 「着彩画演習（教職課程）」と内容が関連している。			
授業に関連するキーワード 素描、鉛筆素描画材、制作過程、実技指導方法、認知科学			
授業の到達目標及びテーマ 造形表現の基礎となる素描を通し、写実表現の基本を修得する。素描の考え方、制作手順、素描画材の理解と習熟を目標とする。考え方、材料、進捗過程を、実制作を通し俯瞰的学び、教材作成や授業計画、実技指導方法の理解を深める。			
授業の概要 静物モチーフを描く、鉛筆素描の演習授業。素描の制作過程を認知科学の立場から学び、実技指導に活かせる技術を身につける。段階別の問題点と解決方法を学ぶ。各種指導（全体、個別、実演）方法の特徴と、参考作品の活用について学ぶ。授業時間外に各自制作を進める事。			
授業計画 第1回 目標、課題、日程説明。素描の考え方、手順、画材。素描。 第2回～第15回 素描。制作手順、レイアウト、十字線。中心線、ガイドライン。参考作品。 面取りと軸傾線。個別指導方法。回転対称形描写、全体指導方法。 直方体描写、実演型指導方法。自然物描写、比較確認指導方法。 加算減算型指導方法。遠近と認知、客観的確認方法（上下逆さま）。 斜面描写（線方向と濃淡）。板書、掲示、参考作品。レタリング描写。口頭説明。 巡回指導（目的と方法）、細密（ハッチング等）描写。課題興味付け法。 比喻型解説方法。擦筆。素描と鉛筆画。 評価（加算法、減算法、総合的、相対、絶対評価）方法。 （定期試験） 課題作品提出			
授業時間外の学習内容等 授業の掲示物、参考作品を見て、資料調べや復習をする。 課題提出や授業内制作のための事前準備や授業時間外制作が必要になる。			
評価方法 演習作品 90%、授業態度等 10%で評価し、60 点以上を単位認定要件とする。			
履修上の注意 美術教員を目指す学生対象。履修希望者が教室の設備空間を越える場合、選抜を行う。 選抜は、教職進路者、総合成績の順。鉛筆素描用具一式、各自準備。			
テキスト なし			
参考書・参考資料等 制作過程資料。参考作品。			

授業科目名	着彩画演習（教職課程） 実	担当教員名	鈴木 司
	Coloring & Shading (Education Course)		
時間割	火曜日 3 時限	オフィスアワー	火曜日 1 時限 要予約
授業科目区分	専門科目—専門共通科目—専門基礎科目		
履修区分	選択科目	授業形態	演習
配当年次・学期	2・3 年次後期	単位数	2 単位
前提とする授業科目、密接に関係する授業科目 「静物素描演習（教職課程）」と内容が関連している。			
授業に関連するキーワード モチーフ描写、描画方法、制作手順、教材作成、解説方法			
授業の到達目標及びテーマ 静物着彩で、描画過程のポイント理解と水性系絵具の基礎技術習得を行う。人工物、自然物などのモチーフ描写から、描画方法、制作手順、教材作成、解説法を学ぶ。			
授業の概要 静物着彩の演習授業。水性系絵具の基礎技術と制作手順を習得する。各種モチーフ配置方法（サムネイル、実寸下絵コラージュ他）を学び、レイアウトをシュミレーションする。教育現場の実技指導で活用出来る知識と説明技術を身につける。授業時間外に各自制作を進める事。			
授業計画 第1回 目標、課題、日程説明。手順、参考作品解説。エスキース。下描き。 第2回～第15回 静物描写。制作手順。サムネイル、コラージュレイアウト。 直方体の描写手順。 回転対称体の描写手順。 自然物の描写手順。 透明色表現（描きはじめ）、ウェットオンウェット。 透明色の利点と欠点。 不透明色表現（描き起こし）。 不透明色の利点と欠点。 筆の使い分け。 陰影描写（絵の具と鉛筆）の特徴。 細部描写に使う筆と使い方。 透明色、不透明色の組み合わせ。 水性系絵の具以外（色鉛筆等）の描画加筆。 最終仕上げの確認方法。完成提出。 （定期試験） 課題作品提出。			
授業時間外の学習内容等 授業の掲示物、参考作品を見て、資料調べや復習をする。 課題提出や授業内制作のための事前準備や授業時間外制作が必要になる。			
評価方法 演習作品 90%、受講態度等 10%で評価し、60 点以上を単位認定要件とする。			
履修上の注意 美術教員を目指す学生対象。履修希望者が教室の設備空間を越える場合、選抜を行う。 選抜は、教職進路者、総合成績の順。水性絵の具用具一式、各自準備。			
テキスト なし			
参考書・参考資料等 制作過程資料。参考作品。			

授業科目名	テキスタイル表現演習 Textile Expression	担当教員名	長沢 桂一
時間割	木曜日 2 時限	オフィスアワー	木曜 4 時限 要予約
授業科目区分	専門科目－専門共通科目－専門基礎科目		
履修区分	選択科目	授業形態	演習
配当年次・学期	2・3 年次 前期・後期	単位数	2 単位
前提とする授業科目、密接に関係する授業科目 各専門専攻科目と関連する			
授業に関連するキーワード 染織、繊維、織機			
授業の到達目標及びテーマ この授業では、繊維の種類や特性を知り、織に関する道具の使用方法や技法を身につけ、テキスタイル表現の面白さや可能性について作品制作を通して体得し、以下に示す 5 つの資質・能力を身につける。 (1) 繊維素材の特性を理解することができる。 (2) 染料を用いた染色による色彩表現を身につける。 (3) 織の基本組織・技法を身につける。 (4) 織機などの道具の扱い方を身につける。 (5) 繊維の特性を生かしたテキスタイル作品を制作することができる。			
授業の概要 この授業では、繊維素材の特性について学ぶことから始まり、染色による色彩と織りによるテキスタイル表現の可能性について学ぶ。実際にさまざまな繊維素材に触れ、その触覚的な特徴を体験し、個々の特性を理解することによって、作品における素材やテクスチャーについての考察を行う。染料を用いた色彩表現の修得と、織の基本組織の理解によって、一本の糸が、作品へと変貌するテキスタイル表現による作品制作を行う。素材を熟知することや、技法を修得することで、今後のより多くの新しい創造性を追求する土台とする。			
授業計画 第 1 回：オリエンテーション（授業全体についての説明。テキスタイル表現による作品解説） 第 2 回：染色 1（染料を用いて糸を染める） 第 3 回：染色 2（染料を用いて糸を染める） 第 4 回：糸の扱いについて（糸巻きなど糸の扱い方について説明） 第 5 回：整経（整経台を用いて、経糸を必要量セットする仕方について説明） 第 6 回：仮筈通し（経糸を仮に筈通しするなど機かけの準備について説明） 第 7 回：機かけ 1（織機に経糸をセットする仕方について説明） 第 8 回：機かけ 2（綜統に経糸を通す説明） 第 9 回：製織 1（織機の扱い方について説明） 第 10 回：製織 2（課題作品制作） 第 11 回：製織 3（課題作品制作） 第 12 回：製織 4（課題作品制作） 第 13 回：製織 5（課題作品制作） 第 14 回：作品仕上げ（織機から作品をはずし、仕上げる方法の説明） 第 15 回：作品仕上げ、作品講評			
授業時間外の学習内容等 指示された作業や制作は、授業時間外に行い、次回授業までに終えておくこと。			
評価方法 授業への取り組み 40%、課題作品 60%として採点する。100 点満点で 60 点以上を単位認定とする。			
履修上の注意 ：授業を行う教室・設備などにより履修定員を前期・後期それぞれを 10 名とします。定員を超えた場合は、抽選を行います。材料費 1000 円程度が必要です。第 1 回目の授業は織実習室 2 で行います。			
テキスト：適宜配付する。			
参考書・参考資料等：授業内で適宜紹介する。			

授業科目名	3D・CG表現演習2 3D/Computer Graphics	担当教員名	近藤 康洋
時間割	木曜日 5 時限	オフィス	
授業科目区分	専門科目－専門共通科目－専門基礎科目		
履修区分	選択科目	授業形態	演習
配当年次・学期	3年次前期	単位数	1 単位
前提とする授業科目、密接に係る授業科目			
授業に関連するキーワード			
授業の到達目標及びテーマ 即戦力として通用する技術の習得、ワークフローへの理解。			
授業の概要 この授業では、「3D・CG表現演習1」の基本技術習得をもとに、より精度の高いキャラクターモデリングを行い、変化に富む性格づけや効果的な場面設定とカメラワークと演出を理解させながら、アニメーション作品を課題制作として完成させるまでを行う。 (全15回) 前期で立てた計画を元に課題制作を行う。 課題制作を通し、ワークフローへの理解を深めてもらう。			
授業計画 第1回 課題制作（計画の見直し） 第2回-第14回 課題制作 第15回 課題制作（評価）			
授業時間外の学習内容等			
評価方法 日々の出席態度（5点） 出来上がったものに対して、学んだことを反映しているかを評価（5点）			
履修上の注意 メモを取るためのノート、筆記用具持参			
テキスト Maya ベーシックス 3DCG 基礎力育成ブック ISBN-10: 4844366408 ISBN-13: 978-4844366409			
参考書・参考資料等			

授業科目名	人物画演習（教職課程） 実 Portraiture (Education Course)	担当教員名	鈴木 司
時間割	水曜日 1 時限	オフィスアワー	火曜日 1 時限 要予約
授業科目区分	専門科目—専門共通科目—専門基礎科目		
履修区分	選択科目	授業形態	演習
配当年次・学期	3・4 年次前期	単位数	2 単位
前提とする授業科目、密接に関係する授業科目 「静物素描演習（教職課程）」と内容が関連している。			
授業に関連するキーワード 自画像、人物画史、表現方法、人物ポーズ、実技指導方法			
授業の到達目標及びテーマ 人物画の多様な表現方法から自画像制作を通して、その目的を理解する。人物画を指導する側の指導技術を修得する。人物画の描かれた目的とその表現方法、ポーズ、色彩などから理解を深める。			
授業の概要 自画像制作の演習授業。人物画の理解を深める。多様な人物画資料から、目的、技法、ポーズ、色彩表現を理解し、制作の参考にす。ハッチング描画で、細密表現の技術習得と写実の効果を確認する。選択自由表現で、個人差、材料、サイズ、量を考慮した教材作成や授業計画の基本を修得する。授業時間外に各自制作を進める事。			
授業計画 第1回 目標、課題、日程説明。参考作品解説。下絵準備。 第2回～第7回 人物描写。グリザイユ、カマイユ画法について。 ハッチング、細密描写について。 人物画、肖像画について。 目描写について。 口、鼻描写について。 頭部、頭髪、額、眉描写について。 第8回～第15回 点描または自由表現について。 下絵準備。人物描写。 耳、首部描写について。 背景描写について。 制作過程について。 講評、評価方法について。 額と絵について。 額装、展示、照明について。 課題作品提出。 (定期試験) 課題作品提出。			
授業時間外の学習内容等 授業の掲示物、参考作品を見て、資料調べや復習をする。 課題提出や授業内制作のための事前準備や授業時間外制作が必要になる。			
評価方法 演習作品 90%、受講態度等 10%で評価し、60 点以上を単位認定要件とする。			
履修上の注意 美術教員を目指す学生対象。履修希望者が教室の設備空間を越える場合、選抜を行う。 選抜は、教職進路者、総合成績の順。絵の具、描画用具一式、各自準備。			
テキスト なし			
参考書・参考資料等 制作過程資料。参考作品。			

授業科目名	絵画技法演習（教職課程） 実	担当教員名	鈴木 司
	Drawing and Painting Technique (Education Course)		
時間割	金曜日 5 時限	オフィスアワー	火曜日 1 時限 要予約
授業科目区分	専門科目—専門共通科目—専門基礎科目		
履修区分	選択科目	授業形態	演習
配当年次・学期	3・4 年次前期	単位数	2 単位
前提とする授業科目、密接に関係する授業科目 「描画材料演習（教職課程）」と内容が関連している。			
授業に関連するキーワード モダンテクニック、にじみ、ドリッピング、マスキング、コラージュ、絵画技法史			
授業の到達目標及びテーマ 近現代の絵画技法の作例から制作方法を学び、モダンテクニックの作品制作で、表現力の幅を広げる。動物園等の生き物や植物を主にモチーフにし、地域と関わりのもてる作品制作を目指す。			
授業の概要 偶然を利用したモダンテクニックを作品制作に生かす方法を学ぶ。にじみ、ドリッピング、スパッタリング、点描、コラージュを使った 3 作品を制作する。身近な植物、動物、生き物など美術の授業で扱いやすいモチーフを描く。授業時間外に各自制作を進める事。			
授業計画 第 1 回 目標、全体課題、日程説明。材料説明。 第 2 回～第 5 回 にじみ技法（ウェットオンウェット、ドライオンウェット）。下絵。作品制作。 スパッタリング技法。水マスキング技法。マスキング。作品提出。 第 6 回～第 10 回 ドリッピング、スパッタリング、点描。制作ポイント。作品制作。 ドリッピング（指ブラシ法、扇筆ノック法）。下絵制作。 ドリッピング（大、小）、点描（規則的、ランダム）。 マスキング（ステンシル式・フローティング式）。作品提出。 第 11 回～第 15 回 コラージュ、制作手順。作品制作。コラージュ用紙制作。 トレースと切り取り、配置。貼り付け、輪郭処理、セパレーション。 著作権、コラージュの協同作品制作。 （定期試験） 課題作品提出			
授業時間外の学習内容等 授業の掲示物、参考作品を見て、資料調べや復習をする。 課題提出や授業内制作のための事前準備や授業時間外制作が必要になる。			
評価方法 演習作品 90%、受講態度等 10%で評価し、60 点以上を単位認定要件とする。			
履修上の注意 美術教員を目指す学生対象。履修希望者が教室の設備空間を越える場合、選抜を行う。 選抜は、教職進路者、総合成績の順。水性絵の具用具一式、各自準備。			
テキスト なし			
参考書・参考資料等 制作過程資料。参考作品。			

授業科目名	製本とブックデザイン Book Design and Making Seminar	担当教員名	水田 圭
時間割	水曜日 2、3 時限	ワイスター	月・金 3 時限、火・木 2 時限、 水 4 時限
授業科目区分	専門科目—専門共通科目—専門基礎科目		
履修区分	選択科目	授業形態	演習
配当年次・学期	3 年次後期	単位数	2 単位
前提とする授業科目、密接に関係する授業科目 なし			
授業に関連するキーワード 製本、手製本、編集デザイン、レイアウト、紙、折、			
授業の到達目標及びテーマ 「本をつくること」について造形と情報の両面から理解し制作することが到達目標となる。装丁、企画、取材、テキストや画像などの素材の作成、編集、レイアウト、エディトリアルデザイン、アートディレクション等からなるブックデザインのプロセスについて総合的に知識・技法を学ぶことがテーマとなる。			
授業の概要 就職活動で手製のポートフォリオが有効であるようにアナログ手法は現在でも有力な表現手段である。この授業では手作業による製本の基礎技術、素材、特に紙の特性や印刷の質感に対する感性を養成する。本の構造や機能、さらにコンテンツのあり方を理解し制作に応用・発展する力を身につける。狭義にブックデザインを捉えアナログ手法を学ぶことで、メディアデザインへの知見を深める。さらに製本における企画やアートディレクションを各自の興味にあわせて深める。学びを深めるため参加学生の技術進度に合わせ授業計画の内容は前後しながら進行する。			
授業計画 第 1～2 回 全体ガイダンス ブックデザインの全体像と製本用語の理解と実践 第 3～4 回 ハードカバーの制作 第 5～6 回 ハードカバーの制作 次回課題説明 第 7～8 回 基礎技術（手わざ）の習得（特別講師） 第 9～10 回 ブックデザイン 企画と調査 第 11～12 回 ブックデザイン 計画／アートディレクション 第 12～13 回 ブックデザイン 取材・素材収集／アートディレクション 第 13～14 回 ブックデザイン 印刷・制作 第 15～16 回 発表・全体講評			
授業時間外の学習内容等 時間外での課題の制作が前提となる。			
評価方法 提出作品および発表の水準、提出される「学びのまとめノート」の評価			
履修上の注意 製本技術について特別講師を招聘する。その予定により日程は変更される。			
テキスト 時間内に各自が製本・編集技術について要点をまとめる。			
参考書・参考資料等 なし			

授業科目名	錯視表現演習（教職課程） <input type="checkbox"/> 実 Optical Illusion (Education Course)	担当教員名	鈴木 司
時間割	木曜日 2 時限	オフィスアワー	火曜日 1 時限 要予約
授業科目区分	専門科目—専門共通科目—専門基礎科目		
履修区分	選択科目	授業形態	演習
配当年次・学期	3・4 年次後期	単位数	2 単位
前提とする授業科目、密接に関係する授業科目 「絵画技法演習（教職課程）」と内容が関連している。			
授業に関連するキーワード 錯視表現方法、錯視体験、認知科学、反復、注視変わり絵、教材作成			
授業の到達目標及びテーマ 近現代表現の一つである錯視表現で作品制作し表現と教材作成の幅を広げる。錯視美術の歴史、考え方、表現方法、使われ方を資料や実作品等を使い、教材参考作品の作り方と使い方を修得する。			
授業の概要 錯視美術作品を鑑賞と制作する演習授業。教材としての制作方法、手順を修得する。参考作品解説と作品制作を通し、錯視体験する。ダブルイメージ、動視錯覚、空間錯視、補色や明度錯視などの錯視作品を鑑賞する。授業時間外に各自制作を進める事。			
授業計画 第1回 目標、課題、日程説明。錯視美術。反復効果、制作。 第2回～第8回 反復作品制作。12分の1円、白黒提出。色認知（並置、補色、明度差）。 半円完成提出、正円制作。動視錯視、重力レンズ効果。 正円（色鉛筆、ペン）着彩。入れ替え増減錯視。 正円（色鉛筆、ペン）着彩提出。線・点対称作品。 ダブルイメージ錯視。 ハイブリッドイメージ錯視。 第8回～第11回 共有錯視。ペン白黒共有作品制作。 回文文字・回文音楽・多重像絵画。 完成提出。回文漫画。シンメトリー写真。 第12回～第15回 共有作品（色鉛筆、ペン）着彩制作。地と図（エッシャー）。 輪郭線のイメージ作品。マグリッド作品。完成提出。 （定期試験）課題作品提出			
授業時間外の学習内容等 授業の掲示物、参考作品を見て、資料調べや復習をする。 課題提出や授業内制作のための事前準備や授業時間外制作が必要になる。			
評価方法 演習作品 90%、受講態度等 10%で評価し、60 点以上を単位認定要件とする。			
履修上の注意 美術教員を目指す学生対象。履修希望者が教室の設備空間を越える場合、選抜を行う。 選抜は、教職進路者、総合成績の順。描画用具一式、各自準備。			
テキスト 授業中に解説資料プリントを適宜配布する。			
参考書・参考資料等 制作過程資料。参考作品。			